第Ⅲ部　東京大学埋蔵文化財調査室要項

97年度発掘調査および整理作業の概要・成果・教育普及活動

1．発掘調査及び整理作業の概要・成果

埋蔵文化財調査室は，本郷キャンパス・駒場キャンパスを中心とする東京大学キャンパスの発掘調査を行い，先土器時代から各時期の調査によって様々な成果を上げつつある。先土器時代の遺物，縄文時代以降の住居址等の遺構・遺物を検出し，本郷台地の土地利用を知る資料として期待される。江戸時代では加賀藩・富山藩・大聖寺藩を中心とする武家屋敷の遺構・遺物を検出し，藩邸内の具体的な変遷・居住者の生活が明らかになりつつある。現在，報告書刊行に向けて整理作業を行っている。

前年度までは大規模な事前調査があいつぎ，本格的な整理作業に取り組める状況ではなかったが，97年度はこれが一段落し，本拠地である駒場第２キャンパスで比較的落ち着いて整理作業に取り組むことができた。また，これまでの発掘調査で出土した大量の遺物の保管場所について，施設部等に改善を要求していたが，茨城県柿岡に収蔵庫が完成し，整理の済んだ遺物をここに移すことによって，整理・保管スペースの状況はやや改善されることとなった。柿岡への遺物の移転などあわただしい面もあったが，時間雇用職員を２名増員するなど，膨大な未整理資料の整理・報告のための体制がようやく整いかけてきたといえよう。以下，発掘調査と整理作業の概要を記す。

a．発掘調査

事前調査１件，立会調査３件，試掘調査１件を行った。事前調査は，医学部教育研究棟地点の二次調査を行い，縄文時代の陥穴，江戸時代の加賀藩邸に関連する遺構・遺物を検出している。試掘調査は，農学部（21世紀館）木質ホール建設予定地点の調査を行った。４枚の生活面を確認した。多くの遺構・遺物の検出が予想された。

b．整理作業（表１）

９遺跡の整理作業を行った。外来診療棟地点では陶磁器類の図版作成が終了している。工学部14号館地点では陶磁器類の実測・トレースを終了し，遺構図版の作成を開始した。病棟地点では，注記作業を昨年度に引き続きジェットマーカー（(株）第一合成社製）によって行った。今年度は2,500箱中，1,500箱の注記を終了した。ジェットマーカーの導入で，来年度中には作業終了の目途が付き，注記作業の省力化を図ることができた。数理学研究棟地点では報告書編集作業を行った（調査の成果は第Ⅱ部参照)。

c．保存処理

病棟地点では約200箱の木製品が出土した。木製品は水付け保存等の保存処理を行わなければ

現状が失われてしまうため，保存処理の実行が早急に必要となった。保存状態が良好な井戸枠など針葉樹を用いた大型の木製品については時間をかけて乾燥し，その他の木製品については，バキュムシーラー（(株）第一合成製）を用い，シート内に木製品とホウサン水を封入し仮保存した。ホウサン水による保存では水が腐食しないものの，ホウサンによって木製品の組織が溶け出し長期の保存には有効ではない事が指摘されており，一部の遺物は組織の溶けだしによる変色が認められた。今後の整理の過程で木製品の変質が少ないといわれる抗菌剤（(株）吉田生物研究所社製）を添加した水溶液の使用を検討している。人形頭部２点，人形手２点については，(株）吉田生物研究所のご厚意により保存処理を行った。人形頭部１点（巻頭カラー）は木質文化財含浸樹脂（アルタインＧ），他の資料は高級アルコール法により保存処理を行っている。今後の木製品の長期保存・管理を考えると，保存処理施設の新設が望まれる。

金属製品の仮保存処理は金属器用ＲＰシステム（(株）三菱ガス化学社製）を用いた。金属製品は医療用メス等によってさびを落とし，エチルアルコールで洗浄しハイバリアフィルムに金属製品とＲＰ剤を封入した。外来診療棟地点のサビ落とし・実測作業を終了した金属製品，病棟地点の材質分類が終了した金属製品に対して仮保存処理を行っている。

病棟地点では講安寺の墓域から人骨が出土している。人骨は樹脂による強化を行わずに陰干しし，付着した土を刷毛等で取り除き，個体別・部位別に収納箱に納めた。

ｄ．遺物収蔵状況（表２）

埋蔵文化財調査室では，1984年度の山上記念館の事前調査以降，継続的に大学構内の発掘調査を行ってきた。これまでの事前調査・試掘調査を含めた総調査面積は約60,400㎡で14,100箱の遺物が出土した。遺物の整理・収蔵は駒場第２キャンパスで行っているが，整理作業スペースとして使用している建物の老朽化，構内の再開発計画に伴い，収蔵庫として使用していた建物の解体が決定し，早急な整理作業スペース，収蔵庫の確保が懸案となっていた。解決策として，７月茨城県新治郡八郷町大字柿岡　工学部・柿岡地区に埋蔵文化財調査室仮設倉庫を建設し，３月報告済の7,420箱を収蔵した。駒場第Ⅱキャンパス内に残りの6,680箱を収蔵しているが，これらのほとんどが未報告資料で，このうち病棟地点をはじめとする未整理資料は今後の整理作業により，最終的な箱数が増加することが見込まれる。また，構内で大規模発掘が予定されており，今後も整理作業スペース，収蔵庫の確保が懸案となる。

ｅ．自然科学分析

自然科学分析は医学部附属病院外来診療棟地点・工学部14号館地点・工学部１号館地点の漆椀について，北野信彦氏（(財）元興寺文化財研究所）に分析をお願いした。工学部１号館地点の漆器の分析結果は紀要編に掲載している。

2．教育普及活動

博物館・美術館で行われた特別展・企画展等に出土遺物の貸出を行った。講演等については室員活動内容参照。

大田区立郷土博物館　『考古学トイレ考』　図録　平成８年２月25日

愛知県陶磁文化館　『企画展　呉州赤絵・呉州染付・餅花手』　開催期間　平成８年11月30日～平成９年２月２日

愛知県陶磁資料館　『秋季特別企画展　遺跡にみる戦国・桃山の茶道具』　開催期間　平成９年10月４日～11月24日

出光美術館　『大皿の時代展－宴の器－』　開催期間　平成10年２月７日～３月29日

現在，外来診療棟地点，工学部14号館地点，原町遺跡，玄蕃所遺跡，病棟地点等の報告書刊行に向けて鋭意整理作業を進めている。また，分析委託，文献調査，遺物の保存処理などについてもかねてからの懸案事項であったが，作業を進める体制が徐々にできつつある。

この年報は，構内遺跡の発掘調査の概要を報告するものであるが，本報告が未刊行のものが多く残されている。これを逐次刊行するとともに，今後学内・外を問わず調査研究成果を公開し，埋蔵文化財に対する理解を深めていきたい。　（原　祐一）

表1　97年度整理作業一覧

地区	番号	遺跡名・調査名（略称）	作業内容
本郷	10	医学部附属病院外来診療棟(HG)	遺物図版作成 遺構図版作成
本郷	14	工学部校舎(14号館)(工14)	遺物実測・トレース・観察表作成・写真撮影，陶磁器以外遺物抽出 図面整理・平面図作成
本郷	17	工学部校舎(1号館)(工1)	木製品(漆碗)実測・トレース・自然科学分析
本郷	23	医学部附属病院病棟Ⅰ・Ⅱ期(HWⅠ・HWⅡ)	遺物洗浄・人骨・木製品の洗浄・金属製品の保存処理，注記作業 図面整理・全体図作成，講安寺文書の調査，講安寺墓地の予備調査
本郷	33	地震研テレメタリング地震観測施設新営(EQL)	平面図作成
本郷	24	医学部教育研究棟(医研Ⅱ)	遺物洗浄 図面整理，全体図作成
駒Ⅰ	9	数理学研究棟(数理)	遺物洗浄・実測・トレース・観察表作成・写真撮影 遺構図版作成，報告書作成作業・原稿執筆
小石川	3	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡](KO)	微細遺物(動物遺体)の抽出
千葉市		検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	石器実測・写真
97年度調査研究年報編集作業			トレース，原稿執筆，陶磁器写真撮影

表2　遺物収納箱数

地区	番号	遺跡名・調査名（略称）	箱数	備　　考
本郷	1	山上会館(U)	210	近世陶磁器類
本郷	2	法学部4号館・文学部3号館(法)，(文)		
本郷	3	御殿下グランド(G)		
本郷	4	医学部病院(病中)，(エネセン)，(給水)，(共同溝)	450	
本郷	5	理学部7号館(理D)	30	
本郷	9	農学部家畜病院(VMC)	20	近世陶磁器類
本郷	10	医学部附属病院外来診療棟(HG)	830	ナイフ形石器，近世陶磁器類
本郷	12	農学部図書館(FAL)	50	近世陶磁器類
本郷	13	農学部校舎(7号館)，新営Ⅰ期(FA792)		
本郷	16	農学部校舎(7号館)Ⅱ期(FA793)		
本郷	14	工学部校舎(14号館)(工14)	990	近世陶磁器類，鍛治関係資料
本郷	15	薬学部新館(YS)	50	近世陶磁器類
本郷	17	工学部校舎(1号館)(FE1)	280	近世陶磁器類，木製品
本郷	18	総合研究棟(SK)	60	近世陶磁器類
本郷	19	医学部附属病院看護婦宿舎(HN)	130	縄文時代土器，近世陶磁器類
本郷	20	総合研究資料館(TUM)	30	近世陶磁器類，懐徳園関連遺構
本郷	21	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	30	古墳時代土器
本郷	22	本郷福利(HF)	60	勾玉，近世陶磁器類
本郷	23	医学部附属病院病棟Ⅰ期(HWⅠ)	2,700	近世陶磁器類，木製品(250箱)，人骨
本郷	23	医学部附属病院病棟Ⅱ期(HWⅡ)		
本郷	24	医学部教育研究棟1次(医研Ⅰ)	220	近世陶磁器類
本郷	24	医学部教育研究棟2次(医研Ⅱ)		
本郷	25	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場(HND)	20	縄文時代土器，古墳時代土器，近世陶磁器類
本郷	28	薬学部資料館(FPS)	10	ナイフ形石器，縄文時代土器，近世陶磁器類
本郷	29	大型計算機センター電気室施設(ACC)	10	近世陶磁器類
本郷	40・30	工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他(AFL・AFC)	40	縄文時代土器，弥生時代土器，近世陶磁器類
本郷	33	地震研テレメタリング地震観測施設新営(EQL)	10	近世陶磁器類
本郷	40	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(ベンチャー)	20	近世陶磁器類
本郷	42	医学部附属病院基幹整備共同溝その他(HWK1)	60	近世陶磁器類
本郷	43	医学部附属病院基幹整備共同溝その他(HWK2)		近世陶磁器類
本郷	44	医学部附属病院基幹整備共同溝その他(HWK3)		近世陶磁器類
本郷	45	医学部附属病院基幹整備共同溝その他(HWK4)		甕棺・人骨
本郷	46	医学部附属病院基幹整備共同溝その他(HWK5)		近世陶磁器類
本郷	47	医学部附属病院看護婦宿舎建設地点(HNⅡ)	100	縄文時代土器，古墳時代土器，近世陶磁器類
駒場Ⅰ	2	教養学部情報教育棟(FGE)	5	縄文時代土器，礫，近世陶磁器類
駒場Ⅰ	9	数理学研究棟(数理)	30	先土器時代石器，縄文時代土器，平安時代土器
小石川	3	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡](KO)	50	縄文時代土器，近世陶磁器類，動物遺体
三鷹市	7	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅰ期(三广1)	60	先土器時代石器，近世陶磁器類
三鷹市	7	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅱ期(三广2)		
三鷹市	7	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅲ期(三广3)		
三浦市		理学部附属臨海実験所新研究棟(MMBS)	15	中世陶磁器，中世人骨
千葉市		検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	10	先土器時代石器393点
試掘調査・立会調査			70	
駒場第2キャンパス（8・16・39号館）総遺物収蔵箱数			6,650	
工学部柿岡地区　埋蔵文化財調査室仮設倉庫収蔵遺物箱数			7,450	
総計			14,100	

なお，ここに記載した箱数は現状の箱数である。今後作業の進捗状況によって箱数の増加が見込まれる。

96年１月～97年度室員活動内容

武藤康弘

学位論文

「縄文時代の長方形大型住居の研究」を東京大学に提出し博士（文学）の学位を授与される。

執筆

平成９年５月20日

「1996年の歴史学会　回顧と展望　日本　考古２」『史学雑誌』106編５号　12-20頁

史学会

平成９年３月31日

「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』藤本　強編所収　13-35頁　同成社

平成10年２月25日

「縄文時代の大型住居－長方形大型住居の共時的通時的分析－」『縄文式生活構造－土俗考古学からのアプローチ－』安西正人編所収　130-191頁　同成社

講演

平成10年２月９日

「縄文時代の長方形大型住居について」（奈良国立文化財研究所）

（文部省科研費重点領域「日本人と日本文化の起源に関する学際的研究」の公募班研究会）

研究発表

平成10年２月10日

シンポジウム「掘立柱建物はいつまで残ったか」（主催　奈良国立文化財研究所）において，考古学の立場からのコメントとして，近世の関東地方における建築物の基礎工法について発表。

調査指導

平成９年８月７・８日

山形県　寒河江市高瀬山遺跡（山形県埋蔵文化財センター）

成瀬晃司

執筆

平成９年３月31日

「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷－文様，銘款を中心に－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１　307-339頁　東京大学埋蔵文化財調査室

平成９年６月
「江戸の武家屋敷と町屋の発掘」『考古学がわかる』AERA Mook　86-89頁　朝日新聞社
平成９年10月
「加賀藩江戸藩邸の調査－天和二（一六八二）年焼失の長屋群－」『地方史・研究と方法の最前線』167-185頁　雄山閣
平成10年１月
「江戸遺跡出土資料からみた徳利出土量の推移」『江戸と周辺地域』江戸遺跡研究会第11回大会発表要旨紙上発表　141-147頁　江戸遺跡研究会
平成10年２月　堀内秀樹共著
「江戸遺跡出土の大皿－加賀藩本郷邸出土品を中心として－」『大皿の時代展－宴の器－』121-131頁　出光美術館

講演

平成９年３月21日
「大名が使った“お道具”」　豊島区区民講座
平成９年３月28日
「伊万里焼の変遷－やきもの流行事情－」　豊島区区民講座
平成９年11月21日
「加賀藩の下級武士の生活について」　文京区区民講座

堀内秀樹

執筆

平成９年３月31日　佐藤律子・遠藤　香共著
「東京大学本郷構内の遺跡　薬学部新館地点SE67出土遺物の年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１　263-277頁　東京大学埋蔵文化財調査室
平成９年３月31日
「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１　279-305頁　東京大学埋蔵文化財調査室
平成10年１月
「擂鉢から見た江戸と周辺地域」『江戸と周辺地域』
江戸遺跡研究会第11回大会発表要旨紙上発表　129-140頁　江戸遺跡研究会
平成10年２月　成瀬晃司共著
「江戸遺跡出土の大皿－加賀藩本郷邸出土品を中心として－」『大皿の時代展－宴の器－』121-131頁　出光美術館

講演

平成9年3月7日

「江戸で使われたやきもの」　豊島区区民講座

平成9年3月14日

「やきものの流通－江戸やきもの戦争－」　豊島区区民講座

原　祐一

執筆

平成9年3月31日

「湯島講安寺における墓域の空間利用－東京大学医学部附属病院病棟地点で検出した埋葬施設の検討－」『東京考古』15　145-156頁　東京考古談話会

大成可乃

執筆

平成9年3月31日

「「瓦積みの穴蔵」について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　245-262頁　東京大学埋蔵文化財調査室

平成9年5月20日

「天和2年の火災で焼失した長屋に伴う炉状遺構について－東京大学医学部附属病院病棟地点出土事例を中心に－」『東京考古』15　117-144頁　東京考古談話会

平成9年10月30日

「1996年の考古学界の動向　近世」『考古学ジャーナル』423　130-139頁

受贈図書目録（1997年１月１日～12月31日）

調査報告書

県名	編集・発行	報告書名
愛　知	（財）瀬戸市埋蔵文化財センター	品野西遺跡
	（財）瀬戸市埋蔵文化財センター	落合橋南遺跡Ⅰ
	（財）瀬戸市埋蔵文化財センター	太子Ａ窯跡
	春日井市教育委員会	神領遺跡発掘調査概要報告書
	東海市教育委員会	浅山新田堤防発掘調査報告
	常滑市教育委員会・（有）西上建設	1997神水古窯発掘調査報告書
	美濃市教育委員会	南山遺跡
	美濃市教育委員会	段　遺跡
	美濃市教育委員会	改田遺跡
青　森	青森県教育委員会	十三湊遺跡Ⅰ
	社会福祉法人つがる三和会	下恋塚遺跡
	青森市教育委員会	独狐遺跡発掘調査報告書Ⅰ
	弘前市教育委員会	大久保（Ａ地区）・小栗山館遺跡
	弘前市教育委員会	史跡　津軽氏城跡（弘前城跡）新寺構発掘調査報告書
	弘前市教育委員会	史跡　津軽氏城跡（弘前城跡）四の丸発掘調査報告書
	弘前市教育委員会	史跡　津軽氏城跡弘前城跡（長勝寺構）薗庭院発掘調査報告書１
	弘前市教育委員会	弥生平遺跡・東岩木山（2）（3）（5）遺跡・山田遺跡・福村城跡
	弘前市教育委員会	石川城跡内館発掘調査報告書
石　川	石川県立埋蔵文化財センター	金沢城石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅰ
岩　手	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	沢田仙人東遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	長倉Ⅳ遺跡・長倉Ⅴ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	耳取Ⅰ遺跡Ａ地区発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	峠山牧場Ⅰ遺跡Ｂ地区範囲確認調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	尾呂部Ⅱ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩脇遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	横町遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	江川鉄山跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	ゴッソー遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	寺久保遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	牧田貝塚発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	柏山館跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	小幅遺跡第２次発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	日詰七久保遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	久保遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・久慈市	上廣生遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	瀬原Ⅰ遺跡第２次・第３次発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	間洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	目名市Ⅱ遺跡発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・久慈市	平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅲ
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・盛岡市	小幅遺跡第４次発掘調査報告書
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・盛岡市	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成８年度）
愛　媛	愛媛大学埋蔵文化財調査室	愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ
	愛媛大学埋蔵文化財調査室	樽味遺跡Ⅲ
大　分	犬飼市教育委員会	下野遺跡・上津尾遺跡
	大分県教育委員会	岩崎横穴墓
	大分県教育委員会	横手遺跡群
	大分県教育委員会	徳瀬遺跡
	大分県教育委員会	府内城三ノ丸北口跡
	大分県教育委員会	大分県内遺跡発掘調査概報４
	大分県教育委員会	机帳原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群

県名	編集・発行	報告書名
大　分	中津市教育委員会	沖代地区条里跡（Ⅱ），福島遺跡東入垣地区（Ⅱ）
	中津市教育委員会	犬丸川流域遺跡群
大　阪	大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団	井ノ内稲荷塚古墳Ⅱ
	大谷女子大学資料館	貝塚寺内町遺跡
	大谷女子大学資料館	四天王寺
	貝塚市教育委員会	東遺跡発掘調査概要Ⅰ
	貝塚市教育委員会	貝塚寺内町遺跡
	貝塚市教育委員会	貝塚市遺跡群発掘調査概要 19
	貝塚市教育委員会	沢新開遺跡発掘調査概要
	貝塚市教育委員会	加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要
	堺市教育委員会	堺市文化財調査概要報告第 62 冊
	羽曳野市遺跡調査会	阿弥陀廃寺跡
	八尾市教育委員会	平成 8 年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市内遺跡
	八尾市教育委員会	平成 8 年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市内遺跡
岡　山	岡山市教育委員会	吉野口遺跡
鹿児島	大口市教育委員会	馬場Ａ・辻町 1・辻町 2 遺跡
神奈川	（財）かながわ考古学財団	池子遺跡群Ⅲ（1）（2）
	小田原市教育委員会	中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書
	小田原市教育委員会	小田原城三の丸御長屋跡第Ⅰ地点
	小田原市教育委員会	物見塚古墳発掘調査報告書
	小田原市教育委員会	平成 6 年度小田原市緊急発掘調査報告書
	相模原市NO.62遺跡発掘調査団	NO.62遺跡発掘調査報告書
	玉川文化財研究所	小田原城三の丸北堀第Ⅰ・Ⅱ地点発掘調査報告書
	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会	鶴嶺八幡宮参道
	茅ヶ崎市教育委員会	下寺尾東方Ａ遺跡・円蔵鶴ヶ町遺跡
	茅ヶ崎市教育委員会	矢畑金山遺跡Ⅵ
	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会	鶴嶺八幡宮参道
	津久井町教育委員会	寺原遺跡発掘調査報告書
	天王原遺跡（Ⅲ）発掘調査団	天王原遺跡発掘調査報告書第Ⅲ地点
	東海大学校地内遺跡調査委員会	東海大学校地内遺跡調査団報告 7
	NO.19寺山遺跡発掘調査団	泰野市NO.19寺山遺跡発掘調査報告書
	平塚市遺跡調査会，平塚市	御領宮遺跡
	平塚市遺跡調査会，平塚市教育委員会	梶谷原・高林寺遺跡他
	平塚市遺跡調査会，平塚市	山王久保遺跡
	平塚市遺跡調査会	稲荷前Ｂ遺跡他
	平塚市遺跡調査会	厚木道遺跡－第 4 地点－
	富士ゼロックス（株）・本郷遺跡調査団	海老名本郷XIV
	三浦市教育委員会	大浦山洞穴
岐　阜	（財）岐阜県文化財保護センター・岐阜県美濃土木事務所	飛瀬・底津遺跡
	（財）岐阜県文化財保護センター・岐阜県土木部	カクシクレ遺跡
	（財）岐阜県文化財保護センター・東海農政局飛騨東部第一開拓建設事務所	与島古墳群
	（財）岐阜県文化財保護センター・岐阜県	北小木古窯跡群・大沢 13 号古窯跡
	神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室	江馬氏城館跡Ⅲ
	高山市教育委員会	高山城跡発掘調査報告書Ⅲ
	土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター	元屋敷窯跡範囲確認調査概報
	宮川村教育委員会	堂ノ前遺跡発掘調査報告書
京　都	（財）京都市埋蔵文化財研究所	京都嵯峨野の遺跡
	（財）京都市埋蔵文化財研究所	鹿苑寺（金閣寺）庭園
	（財）京都市埋蔵文化財研究所	京都市埋蔵文化財調査概要－平成 7 年度
	（財）向日市埋蔵文化財センター，向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書第 44 集
熊　本	人吉市教育委員会	史跡　人吉城跡Ⅶ
	人吉市教育委員会	史跡　人吉城跡Ⅷ
群　馬	赤城村教育委員会	寺内（勝保沢城）遺跡発掘調査概報
	小野上村教育委員会	八木沢清水遺跡
	渋川市教育委員会	八木原沖田Ⅳ・Ⅴ遺跡
	渋川市教育委員会	市内遺跡Ⅶ
	渋川市教育委員会	行幸田南原遺跡
	渋川市教育委員会	石原東遺跡（Ⅱ）
	渋川市教育委員会	石原東遺跡（Ⅲ）
	渋川市教育委員会	半田薬師遺跡
	渋川市教育委員会	八木原沖田Ⅶ遺跡
	渋川市教育委員会	八木原沖田Ⅷ・Ⅸ遺跡

県名	編集・発行	報告書名
群　馬	渋川市教育委員会	中筋遺跡－第11・12次発掘調査－
	渋川市教育委員会	有馬久宮間戸遺跡
	渋川市教育委員会	有馬小貝戸遺跡
	館林市教育委員会	館林市内遺跡発掘調査報告書
	玉村町教育委員会・玉村町遺跡調査会	平塚堰北遺跡
高　知	佐川町教育委員会	上美都岐遺跡
埼　玉	岩槻市教育委員会	岩槻城関連遺跡群発掘調報告書１
	春日部市教育委員会	浜川戸遺跡18次・小渕山下遺跡・花積内谷耕地遺跡４次
	所沢市教育委員会	竹ノ花遺跡・東向大谷遺跡
	所沢市教育委員会	境窪遺跡（第４次）・城遺跡（第２次）・畦の前遺跡（第３次）・南山遺跡
	所沢市教育委員会	柳瀬川流域遺跡群（XⅡ）
	所沢市教育委員会	大堀山館跡
	所沢市教育委員会	東の上遺跡－第 61 次調査－
佐　賀	有田町教育委員会	窯の谷窯跡
	有田町教育委員会	小溝上窯・向ノ原窯
	有田町教育委員会	天神森窯・小物成窯
	唐津市教育委員会	唐ノ川遺跡群
	唐津市教育委員会	八幡溜第Ⅱ遺跡（1）
	唐津市教育委員会	唐津市内遺跡確認調査（12）
	唐津市教育委員会	千々賀古園遺跡（Ⅱ）
	唐津市教育委員会	佐志中通遺跡
	唐津市教育委員会	管牟田西山遺跡・山田団六遺跡
	佐賀市教育委員会	来迎寺遺跡（2・3区）・若宮原遺跡
	佐賀市教育委員会	忠兵衛屋敷遺跡
	佐賀市教育委員会	東千布遺跡Ⅲ
	佐賀市教育委員会	金立遺跡Ⅰ
	佐賀市教育委員会	西千布遺跡・友貞遺跡
	佐賀市教育委員会	下和泉一本椎遺跡Ⅱ
	佐賀市教育委員会	妙常寺北遺跡（1・2区）・妙常寺南遺跡（1区）
	佐賀市教育委員会	牟田寄遺跡Ⅳ
	佐賀市教育委員会	牟田寄遺跡Ⅴ
	佐賀市教育委員会	佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書－1992年度－
	佐賀市教育委員会	徳永遺跡１区
	武雄市教育委員会	武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅳ
滋　賀	甲賀町教育委員会	補陀楽寺城遺跡
	滋賀県虎姫町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室	五村遺跡
静　岡	新居町教育委員会	新居関跡調査報告書Ⅱ
	伊東市教育委員会	寺中・金草原遺跡発掘調査報告書
	伊東市教育委員会・ユニー株式会社・伊藤商業協同組合	西鬼ヶ窪遺跡発掘調査報告書
千　葉	（財）君津郡市文化財センター・岩澤正道	飯野陣屋二の丸跡
	市川市教育委員会	庚塚遺跡第５地点
	市川市教育委員会	須和田遺跡第６地点
	市川市教育委員会	平成元年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告
	君津郡市文化財センター・君津郡市考古資料刊行会	富津陣屋跡発掘調査報告書
	東海大学校地内遺跡調査委員会・水尻遺跡調査団	水尻遺跡
	船橋市教育委員会	平成８年度船橋市内遺跡発掘調査報告書
	船橋市遺跡調査会	夏美台遺跡　第 10 次発掘調査報告
	八街市教育委員会	長者堀柳沢牧野馬土手（第２地点）発掘調査報告書
東　京	（財）東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告
	東京都網代母子寮遺跡調査会	東京都あきる野市網代門口
	足立区伊興遺跡調査会	伊興遺跡
	板橋区遺跡調査会・赤塚下寺家遺跡調査団	赤塚下寺家番匠免遺跡第１地点発掘調査報告書
	板橋区遺跡調査会・四葉二丁目10番遺跡調査団	四葉遺跡（Ｃ地区－１）発掘調査報告書
	板橋区教育委員会・塚ノ内遺跡調査会	志村城山遺跡第２・第３地点発掘調査報告書
	落川・一の宮遺跡（日野３・２・７号線）調査会	落川・一の宮遺跡調査略報Ⅴ－1996年の調査－
	北青山遺跡調査会	北青山遺跡
	墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団，錦糸町駅北口地区市街地再開発組合	錦糸町駅北口遺跡Ⅱ
	新宿区愛住町遺跡調査団	愛住町遺跡Ⅰ
	新宿区市谷加賀町一丁目遺跡調査団，日本電信電話（株）	市谷加賀町１丁目遺跡Ⅰ
	新宿区市谷本村町遺跡調査団	市谷本村町遺跡
	新宿消防署改築予定地遺跡調査団，東京消防庁	百人町三丁目西遺跡Ⅱ
	新宿区南町遺跡調査団	南町遺跡Ⅱ

受贈図書目録（1997年１月１日～12月31日）

県名	編集・発行	報告書名
東　京	墨田区江東橋二丁目遺跡調査団・雇用促進事業団	江東橋二丁目遺跡
	千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会	千駄ヶ谷五丁目遺跡・遺物編
	台東区池之端七軒町遺跡調査会	池之端七軒町遺跡（慶安寺跡）
	台東区湯島貝塚遺跡調査団	旧岩崎家住宅所在遺跡
	地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会，帝都高速度交通営団	四谷御門外橋詰・御堀端通・町屋跡
	地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会，帝都高速度交通営団	四谷御門外町屋跡
	地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会，帝都高速度交通営団	四谷御門外橋詰・御堀端通・町屋跡　考察編
	地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会，帝都高速度交通営団	溜池遺跡　第Ⅰ分冊
	地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会，帝都高速度交通営団	溜池遺跡　第Ⅱ分冊
	千代田区隼町遺跡調査会・警視庁	隼町遺跡
	東京芸術大学発掘調査団	上野忍岡遺跡群
	東京都教育委員会・東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡　先行調査報告４
	東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡　No.457遺跡
	東京都教育委員会・東京埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡　先行調査報告５
	東京都埋蔵文化財センター	汐留遺跡Ⅰ
	東京都埋蔵文化財センター	尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ
	東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡
	東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡
	東京都教育委員会・東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡　先行調査報告６
	東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡
	都内遺跡調査会	御先手組屋敷－駒込艘縄手
	都内遺跡調査会	溜池遺跡
	都立学校遺跡調査会	富士見台Ⅱ（縄文時代編）
	都立学校遺跡調査会	日性寺Ｂ遺跡
	都立学校遺跡調査会	小石川Ⅰ－近世・近代－　遺構編
	新宿区西早稲田３丁目遺跡調査会	西早稲田三丁目遺跡Ⅱ
	日野市落川遺跡調査会	落川遺跡Ⅰ遺構編　第一分冊
	日野市落川遺跡調査会	落川遺跡Ⅰ遺構編　第二分冊
	日野市落川遺跡調査会	落川遺跡Ⅰ遺構編　第三分冊
	日野市落川遺跡調査会	落川遺跡Ⅱ遺物編　第一分冊
	日野市落川遺跡調査会	落川遺跡Ⅱ遺物編　第二分冊
	日野市落川遺跡調査会	落川遺跡Ⅲ自然科学編
	府中市教育委員会・府中市遺跡調査会	武蔵国府関連遺跡調査報告15
	文京区遺跡調査会・（株）東京ドーム	春日町遺跡第Ⅴ地点
	文京区遺跡調査会・文京区役所土木部	本郷台遺跡群
	港区NO.101遺跡調査会	三田臺町･三田臺裏町･芝伊皿子臺町町屋跡遺跡発掘調査報告書
	目黒区東光寺裏山遺跡調査会	東光寺裏山遺跡
栃　木	日本窯業史研究所	殿山遺跡Ⅰ
	日本窯業史研究所	鷲ヶ峰遺跡
	日本窯業史研究所	鷲ヶ峰遺跡
鳥　取	（財）米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室	米子城跡８遺跡
富　山	（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	埋蔵文化財調査概要－平成８年度
	魚津市教育委員会	本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書
	上市町教育委員会	弓庄城跡第３次緊急発掘調査概要
	上市町教育委員会	弓庄城跡第５次緊急発掘調査概要
	立山町教育委員会	芦峅寺室堂遺跡
	砺波市教育委員会	栴檀野遺跡群
	富山県埋蔵文化財センター・朝日町教育委員会	朝日町棚山ゴルフクラブ内遺跡発掘調査報告
	富山県埋蔵文化財センター・福岡町教育委員会	木舟北遺跡
	富山県埋蔵文化財センター・婦中町教育委員会	蓮花寺遺跡の調査
	富山県埋蔵文化財センター・富山県教育委員会	小杉丸山遺跡隣接地区発掘調査概要
	福岡町教育員会	石名田木舟遺跡発掘調査報告書
	福野町教育委員会	寺家新屋敷館跡Ⅱ
	八尾町教育委員会	長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急発掘調査概要
長　崎	長崎市教育委員会	筑町遺跡
	長崎市教育委員会	柿泊遺跡
	長崎市埋蔵文化財調査協議会	興善町遺跡
	南有馬町教育委員会	原城跡
長　野	高遠町教育委員会	史跡　高遠城跡二ノ丸Ⅱ
	高遠町教育委員会	史跡　高遠城跡二ノ丸Ⅲ
	高遠町教育委員会	高遠城跡二ノ丸門発掘調査報告書
	高遠町教育委員会・伊那建設事務所	高遠城－番小屋遺跡・武家屋敷遺跡－

県名	編集・発行	報告書名
奈　良	田原本町教育委員会	唐古・鍵遺跡第 60 次発掘調査概報
	田原本町教育委員会	唐古・鍵遺跡
新　潟	新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団	磐越自動車道関係発掘調査報告書　江内遺跡
	村上市教育委員会	二之町遺跡
兵　庫	高砂市教育委員会	高砂町遺跡
広　島	（財）吉田町地域振興事業団	山手１号・４号古墓
	草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ
	庄原市教育委員会	門田下古墓
福　岡	久留米市教育委員会	両替町遺跡
	久留米市教育委員会	魚屋町遺跡第一次・二次調査
	久留米市教育委員会	久留米城外郭　松田屋敷跡
	太宰府市教育委員会	筑前国分寺遺跡Ⅰ
	太宰府市教育委員会	辻遺跡
	太宰府市教育委員会	宝満山遺跡群Ⅱ
	太宰府市教育委員会	佐野地区遺跡群Ⅶ
	太宰府市教育委員会	太宰府史跡
	福岡市教育委員会，冷泉町155番地内遺跡調査会	博多
	福岡市教育委員会，冷泉町遺跡調査会，東長密寺建設地内遺跡調査会	博多 60
福　島	猪苗代町教育員会	亀ヶ城跡
	猪苗代町教育員会	亀ヶ城跡
	猪苗代町教育員会・成井農林株式会社	三城潟村前遺跡
三　重	大型化石発掘調査団	三重県鳥羽市産恐竜化石発掘調査中間報告書
	亀山市教育委員会	亀山城跡
宮　城	多賀城市埋蔵文化財調査センター・多賀城市教育委員会	高崎遺跡
	多賀城市埋蔵文化財調査センター・多賀城市教育委員会	新田遺跡
	多賀城市埋蔵文化財調査センター・多賀城市教育委員会	市川橋遺跡
	多賀城市埋蔵文化財調査センター・多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局	山王遺跡Ⅰ
	多賀城市埋蔵文化財調査センター・多賀城市教育委員会	小沢原遺跡
山　形	米沢市教育委員会	遺跡詳細分布調査報告書第 10 集
	米沢市教育委員会	台ノ上遺跡発掘調査報告書
山　梨	黒川金山遺跡研究会・塩山市教育委員会・塩山市	甲斐黒川金山

逐次刊行物

県名	編集・発行	報告書名
	日本大学文理学部内　日本大学史学会	「史叢」57号
愛　知	（財）瀬戸市埋蔵文化財センター	平成８年度　年報
	（財）瀬戸市埋蔵文化財センター	研究紀要　第５輯
岩　手	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要　ⅩⅥ
	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要　ⅩⅦ
大　分	大分県教育委員会	大分県埋蔵文化財年報　4
大　阪	高槻市教育委員会	高槻市文化財年報－平成７年度
	中世土器研究会	中世土器研究合冊　71～80号
	枚方市文化財研究調査会	研究紀要　第４集
	牧方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報　18
鹿児島	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	年報　11　－平成７年度－
神奈川	横須賀考古学会	年報　No.29
	横須賀考古学会	年報　No.30
京　都	（財）京都市埋蔵文化財研究所	研究紀要　第３号
	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報　第 62 号
	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報　第 63 号
	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報　第 64 号
	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報　第 65 号
	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度
	（財）向日市埋蔵文化財センター，向日市教育委員会	年報　都城８
東　京	（財）たましん地域文化財団	多摩のあゆみ　第 81 号
	板橋区史編さん調査会	いたばし区史研究　第２
	板橋区史編さん調査会	いたばし区史研究　第３
	板橋区史編さん調査会	いたばし区史研究　第５
	出光美術館	出光美術館研究紀要　第二号
	国際基督教大学博物館　湯浅八郎記念館	年報　No.14　1995－96
	東京都教育委員会	学芸研究紀要第 13 集

県名	編集・発行	報告書名
東　京	東京都埋蔵文化財センター	研究論集　XⅦ
	港区郷土資料館	研究紀要　4
	港区立・港郷土資料館	港区郷土資料館館報－15－
	立正大学熊谷校地遺跡調査室	遺跡調査室年報Ⅷ　平成７年度
	立正大学熊谷校地遺跡調査室	遺跡調査室年報Ⅸ　平成８年度
長　野	長野県立歴史館	研究紀要　第３号
奈　良	田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査年報　4
	田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査年報　5
	帝塚山考古学研究所	考古学における計量分析Ⅴ・Ⅳ
	帝塚山考古学研究所	考古学におけるパーソナルコンピューター利用の状況
広　島	広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室	帝釈峡遺跡群発掘調査室年報　XⅠ
	広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室	帝釈峡遺跡群発掘調査室年報　XⅡ
福　岡	博多研究会	博多研究会誌　第４号
宮　城	多賀城市埋蔵文化財調査センター・多賀城市教育委員会	多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成７年度－
	東北大学埋蔵文化財調査研究センター	東北大学埋蔵文化財調査年報　8　仙台城二の丸跡第９地点の調査
山　口	下関市立考古博物館	下関私立考古博物館年報２－平成８年度
	下関市立考古博物館	研究紀要　第１号
山　梨	帝京大学山梨文化財研究所	研究報告　第６集
	帝京大学山梨文化財研究所	研究報告　第７集
	帝京大学山梨文化財研究所	研究報告　第８集

単行書

県名	編集・発行	書名
愛　知	春日井市教育委員会・大巧社	渡来人
石　川	金沢美術工芸大学美術工芸研究所	『加賀藩御細工所の研究』(一)
	金沢美術工芸大学美術工芸研究所	『加賀藩御細工所の研究』(二)
京　都	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	京都発掘 20 年
	(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター	15年のあゆみ－1981～1996
	(財) 向日市埋蔵文化財センター，向日市教育委員会	『むこうまち往来こばなし』
千　葉	市川市教育委員会	市川市出土遺物の分析　平成７年度市川市埋蔵文化財調査･研究報告
東　京	板橋区史編さん調査会	板橋区市　資料編１　考古
	板橋区史編さん調査会	板橋区市　資料編３　近世
	板橋区史編さん調査会	図説板橋区史
富　山	富山県教育委員会　富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター10年の歩み
長　崎	南有馬町教育委員会	『動乱原城史』
長　野	(財) 長野県埋蔵文化財センター	屋代遺跡群出土木簡（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 21、上越自動車埋蔵文化財発掘調査報告 23
奈　良	帝塚山考古学研究所	朝鮮の古瓦を考える
その他	朝日新聞社	『考古学がわかる』
	古伊万里刊行会　里文出版　関　和男	鍋島小皿－藍鍋島小皿とその周辺－
	平凡社　西田　宏子・出川　哲朗	『明末清初の民窯』　中国の陶磁　⑩
	雄山閣　地方史研究協議会編	地方史・研究と方法の最前線
	古川弘文館	継体天皇と今城塚古墳

図録

県名	編集・発行	書名
愛　知	(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター	瀬戸・美濃系大窯とその周辺
	愛知県陶磁資料館	遺跡にみる戦国・桃山の茶道具
京　都	茶道資料館	釜と掛物　平成九年秋季特別展
東　京	(財) 戸栗美術館	初期伊万里　蔵品選集
	板橋区立郷土資料館	高島秋帆
	板橋区立郷土資料館	長崎唐人貿易と煎茶道
	出光美術館	館蔵　茶の湯の美
	出光美術館	地下宮殿の遺宝
	江戸四宿実行委員会	特別展　江戸四宿
	新宿歴史博物館	落合遺跡展　平成９年度新宿歴史博物館企画展
	静嘉堂文庫美術館	呉州赤絵名品図録
徳　島	徳島県教育委員会・(財) 徳島県埋蔵文化財センター	1997発掘とくしま平成８年度埋蔵文化財速報展
	徳島県教育委員会・(財) 徳島県埋蔵文化財センター	"掘ったでよ阿波" 埋蔵文化財資料展
富　山	富山県埋蔵文化財センター	縄文のなりわい　平成９年度特別企画展

○東京大学埋蔵文化財運営委員会規則

（設置）

第１条　東京大学に東京大学埋蔵文化財運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任務）

第２条　委員会は、東京大学構内における埋蔵文化財に関する重要事項及び埋蔵文化財調査室の運営等に関し必要な事項を審議することを任務とする。

（組織）

第３条　委員会は、委員長及び委員若干名をもって組織する。

（委員長）

第４条　委員長は、総長特別補佐のうちから総長が指名する。

（委員）

第５条　委員は、次の各号に掲げる者に総長が委嘱する。

（１）　医学部長、工学部長、文学部長、理学部長、東洋文化研究所長、史料編纂所長及び事務局長

（２）　埋蔵文化財調査室長

（３）　その他総長が必要と認めた者

２　前項第３号の委員の任期は、２年とする。ただし、再任を妨げない。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置く。

２　幹事は、庶務部長、経理部長及び施設部長をもってあてる。

（庶務）

第７条　委員会の庶務は、事務局施設部企画課において処理する。

（補則）

第８条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附　則

この規則は、平成８年５月21日から施行し、改正後の東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の規定は、平成８年５月11日から適用する。

○埋蔵文化財調査室規則

（設置）

第１条　東京大学埋蔵文化財運営委員会の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第２条　調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

(1)　遺跡調査に対する総括的指導助言

(2)　文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導

(3)　遺物等の保管及び管理

(4)　遺跡調査方法に関する調査研究

(5)　前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第３条　調査室に室長を置く。

2　室長は、東京大学専任の教授又は助教授のうちから総長が委嘱する。

3　室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第４条　調査室に室員若干名を置く。

2　室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第５条　調査室の庶務は、事務局庶務部庶務課において処理する。

付　則

この規則は、1990年７月10日から施行し、1990年６月８日から適用する。

○東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長　上野佳也（～91.3）
藤本　強（91.4～94.3）
青柳正規（94.4～96.3）
今村啓爾（96.4～）

助教授　寺島孝一

助手　武藤康弘
成瀬晃司
堀内秀樹
鮫島和大（95.4～96.3）
原　祐一（95.4～）
大成可乃（96.4～）

事務補佐員　安芸毬子

時間雇用職員　池田奈津子　今井雅子　大貫浩子　香取祐一　川原良子　坂野貞子　宮本尚子
中村和子（92.10～95.8）　大島美智子（92.11～96.3）　岡澤麦子（93.2～95.3）
遠藤　香（95.4～98.3）　佐藤律子（95.9～98.3）

第Ⅳ部　東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 2

東京大学本郷構内の遺跡出土木製品１　工学部１号館地点出土の漆椀

原　祐一

東京大学本郷構内の遺跡出土の木製品

東京大学埋蔵文化財調査室では，江戸時代の加賀藩邸・富山藩邸・大聖寺藩邸において昨年度までに33ヶ所の事前調査・試掘調査を行ってきた。中心とした江戸時代の遺物は陶磁器類を中心に収納箱にして14,000箱を越える。陶磁器以外の遺物である木製品の報告は理学部７号館地点，医学部附属病院地点，山上会館・御殿下地点で行われている[1)]。現在，整理作業中の工学部１号館地点SK01，医学部附属病院病棟地点SK03では大量の木製品が出土した[2)]。両遺跡とも１遺構から出土した良好な一括資料である。そこで，今後この２遺跡を中心に木製品の実測方法，分析方法を提示し，データ化を行う。

１．工学部１号館建設地点

工学部１号館地点は東京大学本郷地区の西，大学の正門近くに位置し，江戸時代の加賀藩上屋敷に該当する。木製品が出土した遺構は，18世紀末から19世紀前半に廃棄されたSK01である。確認された範囲で東西12.5m，南北６ｍ，深さ５ｍを測り，遺構は南北の調査区外に伸びている。木製品は漆椀・下駄・曲物・印籠等が出土している。陶磁器は日常雑器を中心とし，この中には「細工所」等の役所名が墨書された陶器が含まれ，加賀藩邸各所からごみが集められ，SK01に廃棄されたと考えられる。

２．漆椀の実測図・観察表

木製品は漆器と白木に大別し分類を行っている。今回報告を行う漆椀は，轆轤挽きの木地に漆を塗って仕上げた椀・杯といった飲食器で，個体別に分け木製品NO.を付してあり，漆椀をどのように観察し実測図を作成するかを課題とした。これまで江戸遺跡[3)]で報告されている実測図の表現方法（図１），観察表記載内容をふまえた上で，実測図の表現方法，観察表記載内容を提示する。

ａ．実測図表現方法，観察表記載内容

・東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点

実測図　　展開・白抜き

・都立一橋高校地点

病院地点
都立一橋高校地点
紀尾井町遺跡
三栄町遺跡
増上寺子院群
旧芝離宮庭園
細工町遺跡
溜池遺跡（地下鉄7号線溜池駒込間遺跡調査会）
丸ノ内三丁目遺跡
溜池遺跡（都内遺跡調査会）

図1　漆椀実測図　S＝1/4

実測図　　復元実測・白抜き
文様表現　白抜き
観察表　　分類・法量・地色（内・外）・文様の色
写真

・紀尾井町遺跡

実測図　　白抜き
文様表現　漆絵－塗りつぶし
　　蒔絵－白抜き
観察表　　器種・法量・樹種・外面内面色調・文様（色調・施文部位）
写真

・三栄町遺跡

実測図　　白抜き・実際の形態実測に復元実測を重ねる
文様表現　写真
観察表　　形態分類・法量・文様・文様色調・施文部位
写真

・増上寺子院群

実測図　　４種のスクリーントーンで表面色調を表現
　　施文位置・口縁部・畳付の色調の違いと施文位置を記号で表現
文様表現　文様は白抜きで別記
観察表　　器種細別・遺存・法量・色調・文様（色調）・高台内
写真

・旧芝離宮庭園

実測図　　復元実測
　　２種のスクリーントーンで表面色調を表現
文様表現　白抜き
観察表　　法量・表面色調・文様（紋(色)・文字(色)）

・細工町遺跡

実測図　　白抜き・復元実測
文様表現　濃淡で文様色調を表現

観察表　　種別・器形分類形状特徴・法量・吸水重量・樹種・木取り・表面色調・塗り構造・紋様色調・紋様

・丸ノ内三丁目遺跡

実測図　　白抜き・実測図に写真を併記

観察表　　器形・塗り・文様体部－形状・法量・樹種・分析No.

・溜池遺跡（地下鉄７号線溜池駒込間遺跡調査会）

実測図　　白抜き

文様表現　漆絵－塗りつぶし

　　蒔絵－白抜き

観察表　　器種・法量・外面色・文様色・文様種類・特徴

・溜池遺跡（都内遺跡調査会）

実測図　　白抜き

文様表現　濃淡で文様色調を表現

観察表　　分類・残存率・法量・外面・内面・高台・高台内・絵・紋

ｂ．工学部１号館地点の実測図表現方法

工学部１号館地点の漆椀の観察過程で，紋章の中心に紋章の割付に用いる「ブン廻し」の跡と考えられる針跡を確認した。また，紋章や文字の中には筆跡を観察することができた。これらの製作行程を表現するため基本的に，線画，白抜きで表現する。陶磁器類との比較を行うため陶磁器と同縮尺とする。

器種の表現

・変形の著しい漆椀以外は復元実測し線画，白抜きで表現する。

・縮尺は１／４で基本的な表記方法は陶磁器類に準ずる。

・実測図に付けられる記号は以下のことを表す。

▼　表面の塗り分け位置。

├┤　口縁部・摘・畳付の色調の違い。

文様・文字

・紋章は中央に配置し，ブン廻し跡を記載する。

・基本的に白抜きで線画する。

・筆跡が観察できるものは一筆ごと白抜きにする。

・白抜きで表現しにくい複雑な文様はベタ塗りにする。

・濃淡や数色で文様を表現している場合は濃淡で表現する。

c．観察表（表１～３）

観察表には実測図に表現できない部分を記載する。全出土資料を記載することで遺構別の組成を検討する際の基本データとする。個体ごとに木製品No.を付し，図版No.・木製品No.・器種・製作技法・法量・重量・表面色調・装飾技法・文様・内面・備考を記載し，記載しきれない部分は備考欄と事実記載に記載する。

・器種　伝世資料を参考に，飯椀・汁碗・壺椀・平椀・椀蓋・杯・椀（その他の椀）に分類する[4)]。

・重量　推測乾燥重量・推測含水率は保存処理を考慮して算出したものである[5)]。

$$\text{推測含水率（\%）} = \frac{\text{大気中重量}}{3.00 \times \text{水中重量}} \times 100$$

・法量　口径・底径・器高を計測した。紋章の半径は寸，分で表記し備考欄に記載する。

・表面色調　外側と内側の色調を観察した。色調は肉眼による観察で「～色」の表現を用いる。変色などが考えられることから，ここではベンガラ・朱・ウルミといった顔料による発色差は加味していない。口縁部・畳付の色調の差は備考欄に記載する。

・加飾　漆絵・蒔絵等

・文様　文様は，モチーフ・色調・位置を観察する。いわゆる家紋は紋章として扱い，文様の範疇に含める。色調は表面色調同様肉眼観察である。表面色調同様「～色」の表現を用いる。蒔絵の色調は使用した金属粉は加味していないため同様に「～色」の表現を用いた。蒔絵の中で下絵の漆の色が観察可能な場合「赤色に銀色」の表現を用いる。

・内面　飯椀の中で紋章のない資料の中に内面の汚れが著しい資料を確認した。これらの汚れは擦ると取れる付着物や傷であった。同器種であっても紋章のある資料の内面はそれれほど汚れていなかった。今後検討の余事はあるが使用頻度の差の可能性があるため観察表に記載した。

d．「木製品No.」と自然科学分析の「分析No.」

漆椀の用材選択・塗り構造・木取り・使用顔料といった自然科学分析は，（財）元興寺文化財研究所　北野信彦氏にお願いした。「木製品No.」は北野分析の「分析No.」に対応する。詳細は北野氏の分析を参考にしていただきたい[6)]。

３．事実記載

出土した漆椀106個体中，60点の実測図を掲載した（図２～４）。

飯椀

１～12・14は飯椀で，口径12.7～13.1cm，底径5.5～７cm，器高6.4～7.2cm，口径と底径の比率が２対１程度の大振りの椀で安定感がある。

１～９は器壁が厚い椀で，腰部が丸く口縁部にかけて垂直に立ち上がる。高台が低く畳付けの幅は比較的広い，高台内は深く挽かれている。表面色調は外面黒色・内面赤色である。１・２・３は胴部三単位に蒔絵の紋章が描かれる。１は暗黄褐色で丸に瓜・桔梗をモチーフとし，ブン廻し跡が認められる。紋章径は１寸６分である。２は黄褐色で花？をモチーフとする。３は暗黄褐色で幾何学紋様が描かれる。１は高台内に「田」「市」に似た押印がある。漆表面の状況から漆が塗られた後，押印がされたと考えられる。

４～９は加飾の無い椀である。４の高台内には１同様の「田」の押印がある。２は「上」，９は「叶」が赤色で書かれている。「上」「叶」は他の遺跡の資料でも認められる文字である。５・８は赤色のしるしが付けられる。７は「坂」が発色の良い赤色で書かれる。筆跡が観察できる文字である。

10～12・14は腰部に稜を持つ椀で，胴部は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。10は器壁が厚く，高台内は深く挽かれている。表面色調は内外黒色である。蒔絵で紋章が描かれ，色調は茶褐色でモチーフは不明である。11は器壁が薄く高台内は高台脇まで挽かれている。表面色調は外面黒色・内面赤色である。12は器壁が厚く高台が高く高台内の挽きが浅い。内外赤色で畳付けは黒色である。14は器壁が厚い。高台内はレンズ状に挽かれる。内外黒色である。

加飾の無い椀５・６・８・９には内面に汚れが認められた。内外黒色の椀と見間違うほどである。加飾のある資料にも汚れや傷が認められるが，前者のような著しい汚れではない。

汁碗

15～22・13は汁碗で，口径10.9～12.5cm，底径5.8～6.5cm，器高4.1～５cm，で飯碗より小振りである。

15～22は腰部が丸い点は飯椀に似るが，飯碗に比べ腰部から口縁部が緩やかに開く。表面色調は外面黒色・内面赤色である。15～17は胴部三単位に蒔絵の紋章が描かれ，紋章にはブン廻し跡が認められる。15は暗黄褐色で丸に片喰をモチーフとする。文様径は１寸２分である。16は黄褐色で丸に瓜・桔梗をモチーフとする。文様径は１寸２分である。17は暗黄褐色で16同様の文様である。文様径は１寸３分である。

19～21は加飾の無い椀である。この内19・20は底径の幅が他の椀より広い。19は高台内に「ヤ」に似た文字が赤色で書かれる。胴部に赤色の漆が付着しているが文様であるかは不明である。18は高台内に「の」に似た文字が赤色で書かれ，穿穴されている。

13は腰部に稜を持ち，胴部は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。畳付けの幅が広く，内外赤色で口縁・畳付けは黒色である。

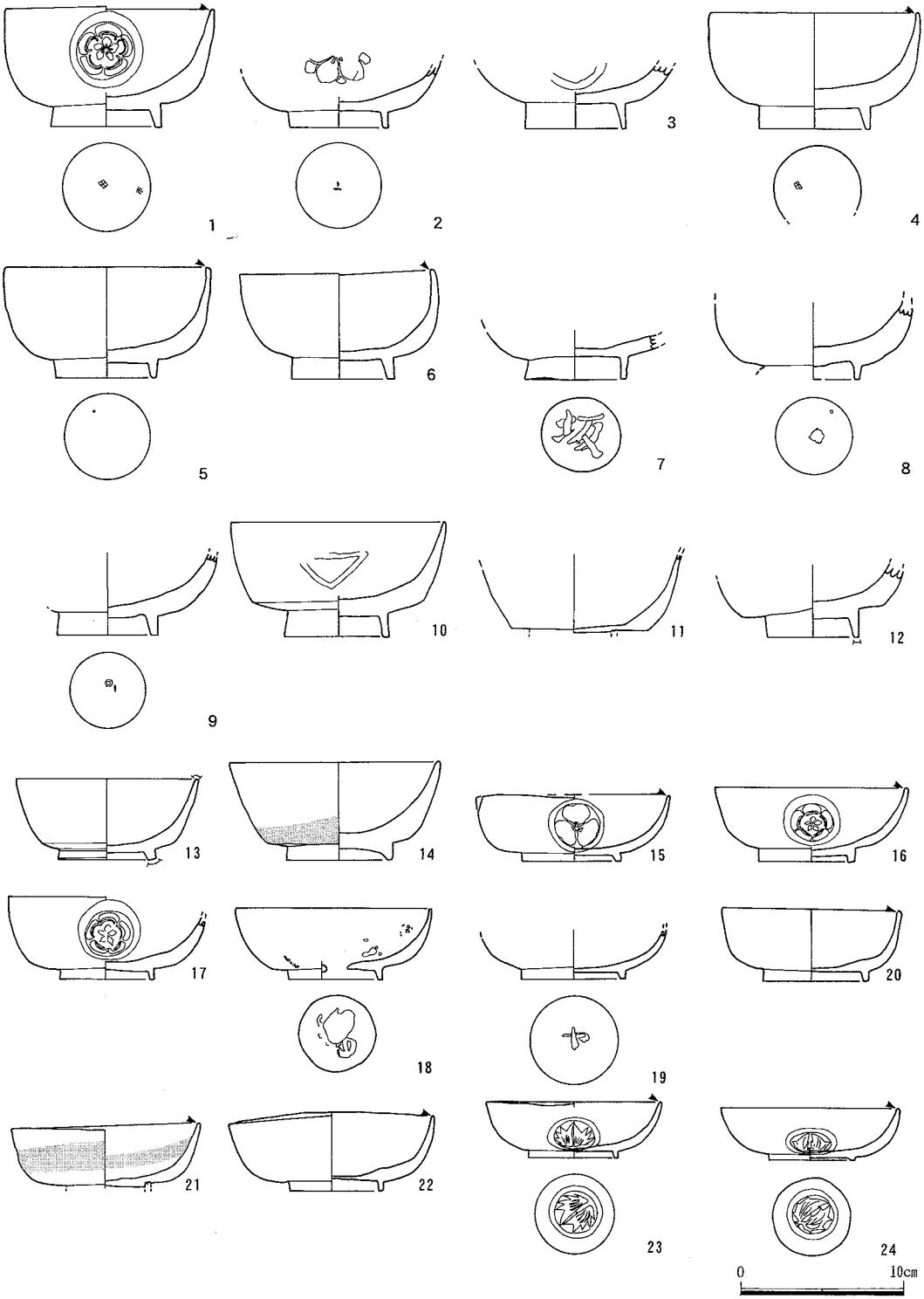


図２　工学部１号館地点出土漆椀１

15・17～19・21は内面に汚れが認められたが飯椀のような著しい汚れは認められない。

飯椀・汁椀蓋

23～35は飯椀もしくは汁椀の蓋で，口径9.6～11cm，底径5.2～5.8cm，器高2.6～3.9cmである。汁椀に比べ腰部から口縁部が緩やかに開く。この中で29・32は小型である。23～35の一般的な形状の椀蓋は，入子にした収納時を意識し，椀と同じように口縁部を上，摘み部を下にしている。

表面色調は外面黒色，内面赤色である。23～29は胴部三単位に蒔絵の紋章が描かれ，紋章にはブン廻し跡が認められる。文様を観察すると蒔絵の下地を書く順は，内文様を囲む丸を描き，続いて内文様を描き蒔絵を施している。23は銀色で丸に抱き柊をモチーフとする。文様径は１寸１分である。24は暗黄褐色で23同様の紋章である。文様径は１寸である。25は暗黄褐色で丸に抱き茗荷をモチーフにする。文様径は１寸１分である。26は暗茶褐色で25同様の紋章である。文様径は１寸である。27は暗黄褐色で七ツ星をモチーフとする。ブン廻し跡はそれぞれの円に認められる。中心の円は文様径４分，周りの円は文様径３分である。28は暗黄褐色で丸に角立一ツ目をモチーフとする。文様径は摘み内が１寸，胴部が９分である。29は赤色の上に銀色の蒔絵が施される。丸に桔梗をモチーフとする。文様径は摘み内が１寸，胴部が９分である。摘み内の文様径は他の椀蓋と変わりないが，胴部には同じ径で文様を描くスペースがないため文様径が小さくなっていると考えられる。

30～35は加飾の無い椀である。30は高台内に「今清」が赤色で書かれる。筆跡が観察できる椀である。31は「の？」が赤色で書かれる。18と同じ筆跡である。

22・30・33は内面に汚れが認められたが飯椀にみられるような著しい汚れではない。椀蓋は取り皿として使用されることもあるが，椀蓋の性格を考えるとそれほど汚れるものではなかったのではないだろうか。

平椀

36～41は平椀で，口径は12.5～13.4cm，5.5～6.8cm，器高は4.6～５cmである。腰部には稜があり面取りされ，胴部から口縁は直線的に立ち上がる。『守貞謾稿』に「壺　本名，ツボサラ也。平本名，ヒラサラ也。此古制ノ曲物ヨリ模シ造ル。トモニ細キ輪ヲカケタリ。細輪ヲ桂ト云也。模之故ニ，壺ト平ハ，外面ニ細紐ヲ挽タリ。蓋，壺，平トモニ，蓋アリ。此二ツノミ椀ヨリハ，蓋ヲ大ニス。他椀ハ，皆，椀ヲ小ニス。」とある[7)]。36～39の胴部には『守貞謾稿』でいう「桂」と呼ばれる隆線が巡る。40・41は完形でないため「桂」の有無は不明である。

36～40は外面黒色，内面赤色である。41は内外黒色で高台内が凸レンズ状に挽かれる。36は胴部に「キ」に似た文字が茶褐色で書かれる。37は高台内に「山田」が赤色で書かれる。筆跡が観察できる椀である。38は高台内に針状の工具で引っ掻いた傷がある。39は胴部に「イ」，高台内には「？久」が茶褐色で書かれる。

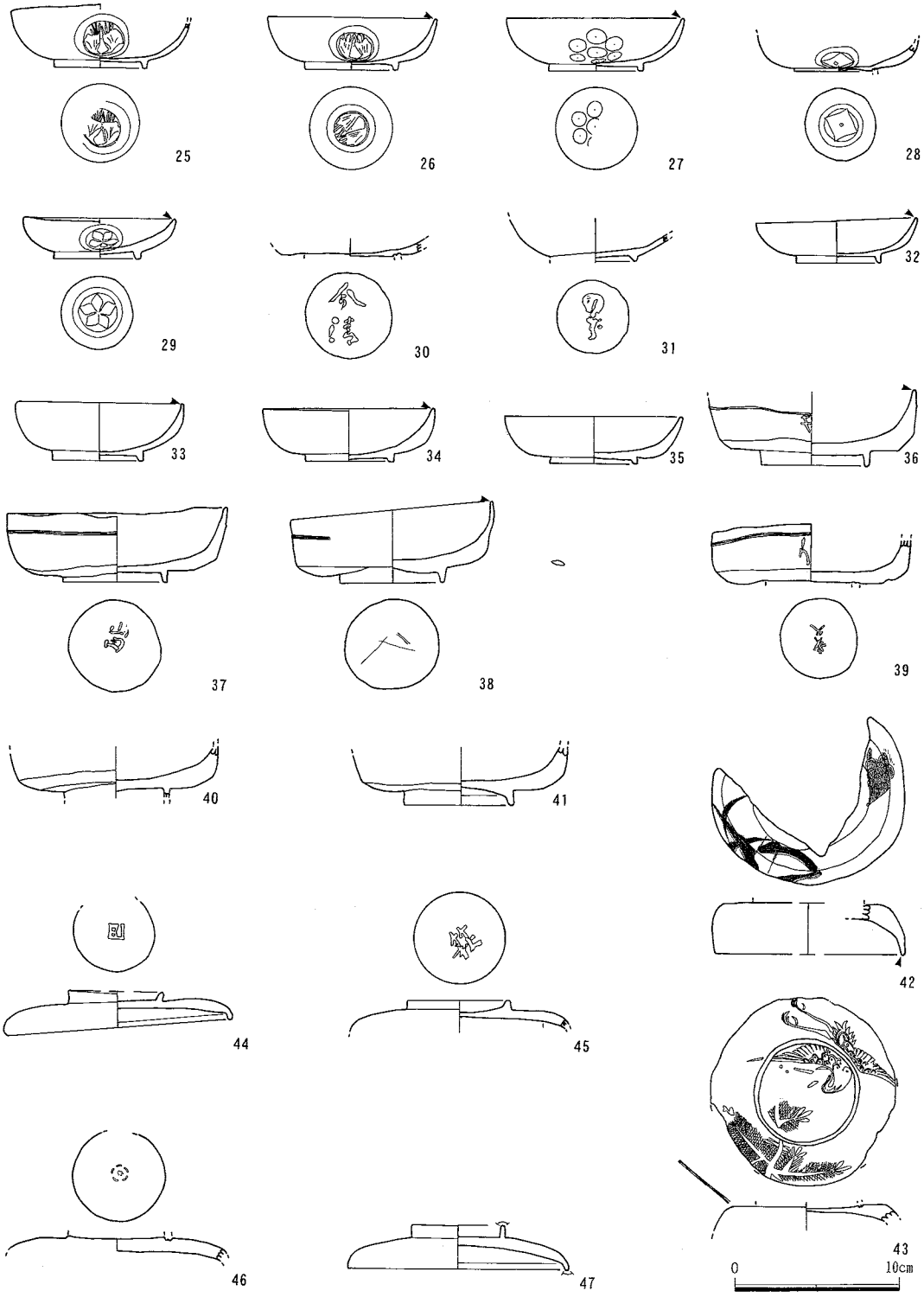


図３　工学部１号館地点出土漆椀２

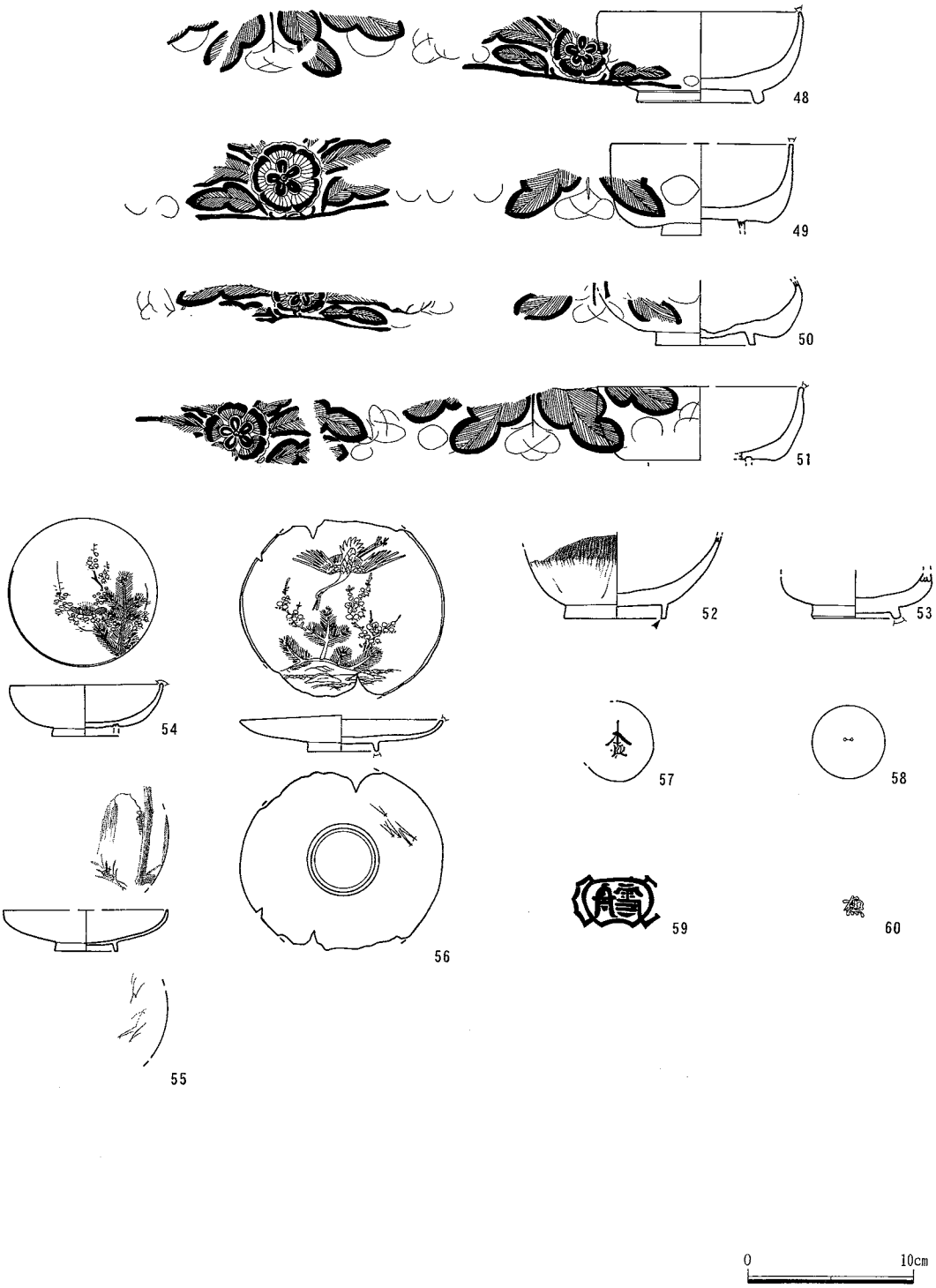


図 4　工学部 1 号館地点出土漆椀 3

表１　工学部１号館地点木製品観察表

図版No.	木製品No.	製作技法	器種	法量(cm)			測定乾燥重量(g)	推定含水率(%)	表面色調		加飾	文様			内面の汚れ	備考
				口径	底径	器高			外	内		モチーフ	色調	位置		
1	12	挽物	飯椀	12.7	6.8	7.2	60	391.7	黒色	赤色	蒔絵	丸に瓜・桔梗	暗黄褐色	胴部三単位	少し	ブン廻し跡（半径8分），押印
2	7	挽物	飯椀		6		39	410.3	黒色	赤色	蒔絵	不明	黄褐色	胴部三単位	なし	高台内「上」：赤色
3	5	挽物	飯椀		6.2		30	237.5	黒色	赤色	蒔絵	丸に？	暗黄褐色	胴部三単位	なし	
4	1	挽物	飯椀	13	6.8	7.1	42	555.9	黒色	赤色					少し	押印
5	10	挽物	飯椀	12.6	6.2	6.8	48	395.8	黒色	赤色					汚れ著しい	
6	3	挽物	飯椀	12.2	6.8	6.7	39	410.2	黒色	赤色					黒色の汚れが著しい	
7	8	挽物	飯椀		6.3		30	500	黒色	赤色						高台内「坂」：赤色，内面入子跡？
8	11	挽物	飯椀				42	500	黒色	赤色					黒色の汚れが著しい	高台内しるし：赤色
9	4	挽物	飯椀		5.2		15	600	黒色	赤色					黒色の汚れが著しい	高台内「叶」：赤色
10	2	挽物	飯椀	13.1	7	6.4	72	298.6	黒色	黒色					不明	
11	14	挽物	飯椀				27	370.4	黒色	赤色					なし	
12	6	挽物	飯椀		5.6		24	625	赤色	赤色					なし	
13	19	挽物	汁椀	11.2	5	4.9	27	296.3	赤色	赤色					なし	口縁・畳付：黒色
14	9	挽物	飯椀	12.8	5.5	6	42	416.7	黒色	黒色					なし	外側入子跡？
15	54	挽物	汁椀	11.9	6.1	4.1	21	428.6	黒色	赤色	蒔絵	丸に片喰	暗黄褐色	胴部三単位	汚れ	文様径（1寸2分）
16	15	挽物	汁椀	10.9	5.8	4.5	18	444.4	黒色	赤色	蒔絵	丸に瓜・桔梗	暗黄褐色	胴部三単位	なし	ブン廻し跡（半径6分）
17	21	挽物	汁椀	12	5.8	5	30	366.7	黒色	赤色	蒔絵	丸に瓜・桔梗	黄褐色	胴部三単位	少し	ブン廻し跡（6分半）
18	22	挽物	汁椀	12	5.8	4.4	24	395.8	黒色	赤色	漆絵	不明	赤色	胴部	少し	高台内文字：赤色，高台内穿穴
19	17	挽物	汁椀		6.4		21	381	黒色	赤色					少し	高台内「ヤ」：赤色
20	13	挽物	汁椀	11	6.5	4.5	24	375	黒色	赤色					なし	
21	55	挽物	汁椀	11.5			15	520	黒色	赤色					黒色の汚れ	入子跡？
22	81	挽物	汁椀	12.5	5.7	4.9	30	343.3	黒色	赤色					汚れ	
23	26	挽物	飯･汁椀蓋	10.8	5.5	3.4	18	333.3	黒色	赤色	蒔絵	丸に抱き柊	銀色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径5分半）
24	23	挽物	飯･汁椀蓋	10.9	5.2	3.3	18	388.9	黒色	赤色	蒔絵	丸に抱き柊	暗黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径5分）
25	34	挽物	飯･汁椀蓋		5.7	3.9	21	285.7	黒色	赤色	蒔絵	丸に抱き茗荷	暗黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径5分半）
26	29	挽物	飯･汁椀蓋	10.4	5.6	3.2	12	333.3	黒色	赤色	蒔絵	丸に抱き茗荷	暗茶褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径5分）
27	28	挽物	飯･汁椀蓋	11	5.8	3.3	15	200	黒色	赤色	蒔絵	七ツ星	暗黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（2分・1分半）
28	31	挽物	飯･汁椀蓋				9	500	黒色	赤色	蒔絵	丸に角立一ツ目	暗黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径4分半）
29	36	挽物	飯･汁椀蓋	9.6	5.4	2.6	12	375	黒色	赤色	蒔絵	丸に桔梗	赤色に銀色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（摘み内半径5分，胴部4分半）
30	53	挽物	飯･汁椀蓋				12	333.3	黒色	赤色					汚れ	摘み内文字「今清」：赤色
31	50	挽物	飯･汁椀蓋				12	333.3	黒色	赤色					なし	摘内文字：赤色
32	79	挽物	飯･汁椀蓋	10	5.3	2.8	9	422.2	黒色	赤色					なし	
33	78	挽物	飯･汁椀蓋	10.4	5.6	3.6	15	380	黒色	赤色					汚れ	
34	82	挽物	飯･汁椀蓋	10.5	5.4	3.3	24	508.3	黒色	赤色					なし	
35	30	挽物	飯･汁椀蓋	11	5.4	2.9	12	375	黒色	赤色					なし	
36	40	挽物	平椀(桂)	12.8	6.7	4.7	30	566.7	黒色	赤色					なし	胴部文字：茶褐色
37	41	挽物	平椀(桂)	13.4	5.5	4.6	30	483.3	黒色	赤色					汚れ	高台内「山田」：赤色
38	83	挽物	平椀(桂)	12.5	6.4	5	18	416	黒色	赤色					なし	高台内ケガキ
39	42	挽物	平椀(桂)				27	518.5	黒色	赤色					なし	高台内・胴部文字：赤色

表２　工学部１号館地点木製品観察表

図版No.	木製品No.	製作技法	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	測定乾燥重量(g)	推定含水率(%)	表面色調 外	表面色調 内	加飾	文様 モチーフ	文様 色調	文様 位置	内面の汚れ	備考
40	39	挽物	平椀				30	433.3	黒色	赤色					なし	胴部文字：茶褐色
41	38	挽物	平椀		6.8				黒色	黒色					なし	
42	48	挽物	椀蓋	11.8			12	250.6	赤茶色	黒色	蒔絵・漆絵	茗荷と？	赤色に金色，黒色	胴部	なし	52と同一個体
43	49	挽物	椀蓋				15	380	黒色	赤色	蒔絵	若松に鶴	赤色に金色	外面	なし	
44	43	挽物	平椀蓋	14	5.8	2.7	15	400	黒色	赤色					なし	摘内「巴」：黄褐色
45	46	挽物	平椀蓋		6.4		72	296.3	黒色	黒色					なし	摘内「竹・秋」
46	47	挽物	平椀蓋				18	611.1	黒色	赤色	漆絵	梅	赤色	摘内	なし	
47	45	挽物	平椀蓋	13.5	5.7	2.7	57	201.8	黒色	赤色	蒔絵				なし	口縁部・畳付：金色
48	57	挽物	椀	12.5	7.7	5.5	30	500	黒色	黒色	漆絵	芙蓉	赤色	胴部	なし	吉野椀（菓子椀），口縁部：赤色
49	56	挽物	椀	11		5.5	30	523.3	黒色	黒色	漆絵	芙蓉	赤色	胴部	なし	吉野椀，口縁部：赤色
50	58	挽物	椀		6		18	666.7	黒色	黒色	漆絵	芙蓉	赤色	胴部	なし	吉野椀
51	59	挽物	椀	12.4			18	538.9	黒色	黒色	漆絵	芙蓉	赤色	胴部	なし	吉野椀，口縁部：赤色
52	80	挽物	椀		6.2		21	476.2	黒色	暗褐色			赤色		なし	
53	76	挽物	椀		5.4		18	338.9	赤色	赤色					なし	畳付：黒色
54	61	挽物	杯	9.2		3.1	9	333.3	赤色	赤色	蒔絵	若松に梅	金色，黒色	内面	なし	口縁部：茶色
55	60	挽物	杯	9.9	3.8	2.1	6	166.7	赤色	赤色	蒔絵	床に籠花掛・枝垂れ柳・水仙，松葉	金色	内面 外面	なし なし	
56	62	挽物	杯	12.2	4.3	2.2	12	291.7	赤色	赤色	蒔絵	若松・梅に鶴，松葉	黒色に金色	内面，外面	なし	
57	68	挽物	椀･椀蓋				9	200	黒色	赤色					なし	摘内「本極」：赤色
58	20	挽物	椀･椀蓋				15	500	黒色	赤色	蒔絵	丸に瓜・花菱	黄褐色に銀色	胴部三単位	なし	高台内しるし：赤色
59	66	挽物	椀				3	133.3	黒色	赤色	漆絵	文字「雪船」	赤色	胴部	なし	
60	51	挽物	椀･椀蓋				12	466.7	黒色	赤色					なし	摘内文字：黒色
	16	挽物	椀		6.4		15	366.7	黒色	赤色	蒔絵	楓	赤色に金色	胴部	汚れ	
	18	挽物	汁椀		5.9		24	500	黒色	赤色					汚れ	
	24	挽物	椀蓋		5.5		6	416.7	黒色	赤色					なし	
	25	挽物	椀蓋				15	200	黒色	赤色					汚れ	
	27	挽物	椀蓋		6		9	388.9	黒色	赤色	蒔絵	蔦	暗黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	
	32	挽物	椀蓋				18	333.3	黒色	赤色	蒔絵	丸に？	黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径4分半）
	33	挽物	椀蓋		5.6		6	333	黒色	赤色	蒔絵	丸に？	暗黄褐色	胴部三単位，摘内	なし	ブン廻し跡（半径5分）
	35	挽物	汁椀		6.2		12	333.3	黒色	赤色	蒔絵	丸に瓜・花菱	暗黄褐色	胴部三単位	なし	ブン廻し跡（半径6分）
	37	挽物	平椀(桂)		6.1	5.5	30	400	黒色	赤色					少し	
	44	挽物	平椀		6.2		3.3	409	黒色	赤色	蒔絵	三つ巴	金色	胴部	なし	
	52	挽物														48と同一個体
	63	挽物	椀蓋				6	166.7	黒色	赤色					なし	高台内文字：赤色
	64	挽物	椀				6	166.7	黒色	赤色	蒔絵	不明	暗黄褐色	胴部三単位	汚れ	
	65	挽物	椀				6	166.7	黒色	赤色					汚れ	
	67	挽物	椀蓋				3	66.7	黒色	赤色					なし	高台内文字：赤色
	69	挽物	椀				12	250	黒色	赤色						
	70	曲物	椀				21	476.2	黒色	赤色					なし	
	71	曲物	容器													

表３　工学部１号館地点木製品観察表

図版No.	木製品No.	製作技法	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	測定乾燥重量(g)	推定含水率(%)	表面色調 外	表面色調 内	加飾	文様 モチーフ	文様 色調	文様 位置	内面の汚れ	備考
	72	曲物	印籠													
	73	曲物	容器													
	74	曲物	容器													
	75	挽物	容器蓋													
	77	挽物	椀蓋				9	444.4	黒色	赤色					少し	
	84	挽物	平椀(桂)				12	416.7	黒色	赤色					なし	
	85	挽物	椀蓋				2		黒色	赤色					少し	
	86	挽物	椀				1		赤色	赤色						
	87	挽物	平椀蓋				1		黒色	赤色					なし	
	88	挽物	椀				5		黒色	赤色					なし	
	89	挽物	椀蓋				5		黒色	赤色					なし	
	90	挽物	椀				4		茶色	赤色					なし	
	91	挽物	平椀蓋		6		20		暗褐色	黒色					なし	
	92	挽物	椀蓋				9		茶色	赤色					少し	
	93	挽物	椀蓋				7		黒色	赤色					なし	
	94	挽物	椀				4		赤色	赤色					汚れ	
	95	挽物	平椀蓋				6		黒色	赤色					なし	
	96	挽物	椀				3		黒色	赤色					なし	
	97	挽物	椀				2		暗褐色	赤色						
	98	挽物	椀				5		黒色	赤色					少し	
	99	挽物	椀				1		黒色	赤色						
	100	挽物	椀				6		黒色	赤色					少し	
	101	挽物	椀蓋				2		黒色	赤色					なし	
	102	挽物	椀				7		黒色	赤色					汚れ	
	103	挽物	椀				4		黒色	赤色					汚れ	
	104	挽物	杯				1		赤色	赤色	蒔絵	若松	黒色・金色	内面	なし	口縁部・畳付：黒色
	105	挽物	杯				1		赤色	赤色					少し	
	106	挽物	椀				2		黒色	赤色						
	107	挽物	椀				5		黒色	赤色					少し	
	108	挽物	椀				2		黒色	赤色					少し	
	109	挽物	椀				3		黒色	赤色						
	110	挽物	椀				3		赤色	赤色						
	111	挽物	椀				9		黒色	赤色						

椀蓋

23～35以外の蓋と，平椀の蓋をここでは扱う。実測は使用時を意識して口縁部を上，摘み部を下にしている。

42・43は腰部に一直線の稜を持つ椀蓋である。42は外面赤茶色，内面黒色である。蒔絵で茗荷と草？をモチーフとした文様が書かれる。金属粉は一部失われているが，茗荷は赤色で全体を描き黒色で線を入れ，金色の蒔絵を施している。草？は黒色と赤色で描いている。摘みから口縁部に直線的に引かれた赤色の二本の線には金色の蒔絵を施している。43は外面全体を使って鶴と若松が描かれる。下地を赤色で描き金色の蒔絵を施している。

44～47は平椀の蓋である。口径13.5～14cm，摘み径6.4～5.8cm，器高2.7cmである。被せ蓋で，36～41に被せることができる口径である。44・46・47の摘み内は摘み脇まで直線的に挽かれる。45はレンズ状に深く挽かれる。

44・46・47は外面黒色，内面赤色である。45は内外黒色である。文様・文字はすべて摘み内に書かれる。44は蒔絵で「巴」が黄褐色で書かれる。45は「竹」と「秋」の文字が赤色で描かれている。「竹」の後に「秋」が描かれたもので竹の方が若干明るい色調である。46は梅が書かれる。47は摘みと口縁部に金色の蒔絵が施される。

その他の椀

48～51は外面に芙蓉が鮮明な赤色で描かれている。表面色調は内外黒色で，48・50・51の口縁部は赤色である。吉野産のいわゆる「吉野椀」との関連性が考えられる資料である[6)]。48は口径12.5cm，底径7.7cm，器高5.5cmで，胴部から口縁にかけてが丸みを帯びる。口径と底径の比率が約1.6：1で，畳付けの幅が8mmと広い。『守貞漫稿』には，胴部が丸みを帯びた椀で，摘みと畳付けの幅が厚い椀が描かれており，「菓子椀　京坂，本膳必ラズ漆之也。形，汁椀ニテ，大形，又厚シ。平ト似タル食ヲ盛ル。蓋，平ハ，スマシ，菓子ワンニハ，葛ヲ加ユル等也。又，四ツ椀ト，平ト，壺ハ，必ラズ同製同色ナリ。菓子ワンハ，別製，異色ヲモ交ヘ用フ江戸ハ更ニ無之。」とある。『商用録』にも「菓子椀」描かれており，本資料に似た特徴を持つ。『商用録』では「吸い物椀」の一つのバリエーションとして扱われている[8)]。

49～51は胴部に稜を持つ資料である。腰部が丸く胴部から口縁部は急角度で立ち上がり，胴部から口縁部は垂直に立ち上がる。52は底径が6.2cmと広く，腰部から口縁部が斜めに開く。外面黒色，内面茶褐色である。口縁から胴部が赤色で塗られている。

52は胴部から口縁部が丸味を帯びた椀で，高台内黒色・内面暗褐色で口縁部は赤色濃淡で塗られている。

53は腰部が丸く胴部が垂直に立ち上がる。内外赤色で畳付けは黒色ある。畳み付けの幅は6mmと広い。

杯

54～56は杯である。

54は口径9.2cm，器高3.1cmで腰部から口縁部は丸みを帯びる。深めの杯である。内外赤色で口縁部は茶色である。内面に漆絵と蒔絵で若松と梅が描かれる。55は口径9.9cm，底径3.8cm，で器高3.1cmで腰部から胴部はなだらかに立ち上がり，口縁部近くで急角度で立ち上がる。内外赤色である。文様は金色の蒔絵で，内面に正月の茶事をモチーフとした，床の間の床柱に掛けた籠花掛に枝垂柳，水仙，外面には敷き松葉が描かれる。56は口径12.2cm，底径4.3cm，器高2.2cmで他の杯に比べ口径があり器高が低い。胴部はなだらかに立ち上がり口縁近くで立ち上がりが急になる。内外赤色で口縁部と畳付けが金色である。蒔絵で，内面に若松・梅に鶴，外面に敷き松葉が描かれる。

出土した杯はそれぞれ形状・大きさが異なるが，「若松・梅」「正月の茶事・水仙」「若松・梅・敷き松葉」と正月～早春をモチーフとした文様が描かれており，文様のモチーフに限ってはまとまった資料群といえる[9)]。

破片

57～60は破片である。

57は高台部分で，外面黒色，内面赤である。「本極」が赤色で描かれる。他の遺跡の資料でも認められる文字である。58は椀もしくは椀蓋で変形が激しいため，高台内もしくは摘みを図化した。外面黒色，内面赤色である。胴部三単位で丸に瓜・花菱をモチーフにした紋章が黄褐色に銀色の蒔絵で描かれる。赤色でしるしが描かれる。59は椀の胴部で，外面黒色，内面赤色である。外面に赤色で「雪舟」が書かれる。60は椀もしくは椀蓋で，外面黒色，内面赤である。高台内に赤色で「極」が書かれる。他の遺跡の資料でも認められる文字である。

おわりに

SK01から出土した漆椀の実測・データ化を行った。遺構ごと遺跡ごとの遺物のデータ化は使用状況・遺跡の性格を検討する上で必要な作業であると考えている。今後，陶磁器類の分析と合わせて使用状況・組み合わせ・廃棄状況の検討を行い，藩邸内での生活用具の購入・使用・廃棄について検討を行っていきたい。

本論文作成にあたり，以下の方々にご助言，ご協力いただいた（敬称略）。
秋元智也子・及川吉生（明治大学記念館前遺跡調査団）　及川登・中野高久（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会）　後藤まゆみ・岡真理香（新宿区立新宿歴史博物館）　北野信彦（元興寺文化財研究所）　小林達夫・吉田恵二（國學院大學）　柴沼圭子　武田昭子（昭和女子大学）　松田隆嗣（福島県立博物館）　宮崎勝美（東京大学史料編纂所）　名久井芳枝　四柳嘉章（漆器文化財科

学研究所）　成瀬晃司　堀内秀樹　武藤康弘　今井雅子　香取祐一　坂野貞子

註

1）　東京大学理学部遺跡調査室1989『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書１　東京大学本郷構内の遺跡　理学部７号館地点』

東京大学遺跡調査室1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書４　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

2）　原祐一1995「江戸時代の木製品　東京大学本郷構内の遺跡」『季刊考古学第53号　特集　江戸時代の発掘と文化』雄山閣　P11

武藤康弘1996「10　工学部校舎（１号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報１』東京大学埋蔵文化財調査室　P31・32

3）　東京大学遺跡調査室1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

都立一橋高校内遺跡調査団1985『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』

千代田区紀尾井町遺跡調査会1988『紀尾井町遺跡調査報告書』

東京都新宿区教育委員会1988『三栄町遺跡』

東京都港区教育委員会1988『芝公園一丁目　増上寺子院群　光学院・貞松院跡　源光院跡』

旧芝離宮庭園調査団1988『旧芝離宮庭園』

新宿区厚生部遺跡調査会1992『細工町遺跡』

（財）東京都教育文化財団　東京都埋蔵文化財センター1994『丸の内三丁目遺跡』

地下鉄７号線溜池駒込間遺跡調査会1996『溜池遺跡』

都内遺跡調査会1996『溜池遺跡』

千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』

4）　荒川浩和1975『漆椀百選』光琳社

5）　松田隆嗣1996「木製品を残すために」『企画展　いにしえの木の匠－木製品は語る－』福島県立博物館　P58～61

沢田正昭1997「第３章　木製遺物の保存処理」『文化財保存科学ノート』近未来社　P69～104

6）　第Ⅳ部　東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要２所収　北野信彦　東京大学本郷構内遺跡（工学部１号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法

7）　喜多川守貞著　朝倉治彦編集1988『合本　守貞漫（謾）稿』東京堂出版　後集巻之一　食類　P279

8）　輪島市史編纂委員会1973「商用録」『輪島市史　資料編第六巻輪島漆器資料』　P427･428

9）　茶事・茶花については以下を参考にした。平凡社1991『茶の歳時記辞典　炉　風炉』，平凡社1991『茶の歳時記辞典　炉　風炉』，学習研究社1996『野草実用図鑑〔５〕茶花の入れ方（第15刷）』，講談社1994『生活ごよみ－冬』

東京大学本郷構内遺跡（工学部1号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法

（財）元興寺文化財研究所　北野信彦

1.はじめに

東京大学本郷構内遺跡（工学部1号館地点）からは加賀藩前田家屋敷跡関連の遺構・遺物が多数検出され，漆器資料も多く含まれている。今回，東京大学埋蔵文化財調査室の御厚意によりこれら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。

本報ではこの調査結果および，そこから派生する幾つかの問題点について報告する。

2.出土漆器資料の調査

各種出土生活什器の内でも飲食器（椀・蓋・皿類）は，衣・食・住のなかにおいて「食」という我々の日常・非日常の生活の在り方と密接に関わる資料（物質文化財）である。それと即応するためか遺跡から出土する什器類のうち，漆器・陶磁器ともに飲食器が占める割合が極めて高い。このような飲食器資料の生産技術（ここでは材質や製作技法）と，使用階層や使用状況との関連性が把握されれば，これらが出土した遺構・遺跡の性格，即ちそこで生活していた人々の暮らしぶりの一端がある程度推定されよう。

特に漆器資料は，陶磁器資料と比較して，木胎・塗り・加飾等，材質や製作技法に関する属性が多く，これらの品質は自然科学的手法による調査によって，より客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の材質と製作技法を調査することは，個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり，これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。本報では，これら漆器資料の形態，漆塗り面の状況を表面観察した後，(1) 用材選択，(2) 木取り方法，(3) 漆膜面の漆塗り構造，(4) 色漆の使用顔料，(5) 蒔絵材料，等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。まず，その調査方法と調査結果を記す。

(1) 調査方法

・用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は，出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し，その結果を新材と比較することでなされる。試料は，カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように，破切面などオリジナルでない面から木口，柾目，板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

・木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の調査は，樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生

Teble. 1　東京大学本郷構内遺跡（工学部 1 号館地点）出土漆器観察表

No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			使用顔料			塗装構造		備考
				内	外	文様	内	外	文様	内	外	
1	飯椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	押印
2	飯椀	トチノキ	A	黒	黒					Ⅴ	Ⅴ	
3	飯椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
4	飯椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	高台内[叶]：赤
5	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
6	飯椀	ブナ	B	赤	赤			ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
7	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		ベンガラ，SN	Ⅲ	Ⅴ	高台内[上]：赤
8	飯椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	高台内[坂]：赤
9	飯椀	トチノキ	A	黒	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
10	飯椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
11	飯椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
12	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
13	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
14	飯椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
15	汁椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
16	汁椀	ブナ	B	赤	黒	外−紋−金	ベンガラ		ベンガラ，Au	Ⅰ	Ⅱ	
17	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	高台内[ヤ]：赤
18-1	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
18-2	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
19	汁椀	ブナ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	口縁部黒
20	汁椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐銀	ベンガラ		As＋S	Ⅰ	Ⅱ	高台内印：赤
21	汁椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		ベンガラ，SN	Ⅰ	Ⅱ	
22	汁椀	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	高台内文字：赤
23	椀蓋	ブナ	B	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		ベンガラ，SN	Ⅰ	Ⅱ	
24	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
25	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
26	椀蓋	ブナ	B	赤	黒	外−紋−銀	ベンガラ		ベンガラ，SN	Ⅰ	Ⅱ	
27	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
28	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
29	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
30	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
31	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
32	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
33	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
34	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
35	汁椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
36	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−銀	ベンガラ		ベンガラ，SN	Ⅰ	Ⅱ	
37	平椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
38	平椀	ブナ	B	赤	黒					Ⅹ	Ⅹ	
39	平椀	ブナ	B	黒	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
40	平椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
41	平椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	高台内[山田]：赤
42	平椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅰ	高台内文字：赤
43	平椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ		ベンガラ，As＋S	Ⅰ	Ⅰ	高台内[巴]：赤
44	平椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−金	朱		ベンガラ，Ag	Ⅰ	Ⅰ	
45	平椀蓋	カツラ	A	赤	黒		朱＋ベンガラ		Au	Ⅴ＋Ⅴ	Ⅶ＋Ⅴ	縁金
46	平椀蓋	ブナ	B	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
47	平椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−赤	ベンガラ	ウルミベンガラ	ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	高台内[竹，秋]：赤
48	椀蓋	ブナ	B	黒	赤茶	外−絵−赤			Au，朱	Ⅰ	Ⅱ	
49	椀蓋	ブナ	B	赤	黒	外−絵−金，赤	ベンガラ		Au，Ag，朱	Ⅰ	Ⅱ	
50	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅰ	高台文字：赤
51	汁椀	ブナ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
52	椀蓋	ブナ	B	黒	赤茶	外−絵−金，赤		ウルミベンガラ	Au，朱	Ⅰ	Ⅰ	−
53	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅰ	高台内[今清]：赤
54	汁椀	トチノキ	A	赤	黒	外−紋−銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	

東京大学本郷構内遺跡（工学部１号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法

No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			使用顔料			塗装構造		備考
				内	外	文様	内	外	文様	内	外	
55	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
56	椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	吉野塗
57	椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	吉野塗
58	菓子椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤			朱	Ⅰ	Ⅱ	吉野塗
59	椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤			朱	Ⅰ	Ⅱ	吉野塗
60	酒盃	サクラ亜属	A	赤	赤	内－絵－金	朱	朱	Au＋Ag	Ⅵ	Ⅴ	
61	酒盃	ブナ	B	赤	赤	内－絵－金	朱	朱	Au＋Ag	Ⅳ	Ⅲ	
62	酒杯	トチノキ	A	赤	赤	内－絵－金,黒	朱	朱	Au	Ⅳ	Ⅲ	
63	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅰ	高台内文字：赤
64	椀	トチノキ	B	赤	黒	外－紋－黄褐色	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
65	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
66	椀	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
67	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	高台内文字：赤
68	椀蓋	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅰ	高台内[本極]：赤
69	椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
70	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
71	容器	ヒノキ	A	黒茶	黒茶					Ⅰ	Ⅰ	
73	曲物	針葉樹	－	赤	－		ベンガラ			Ⅰ	－	
74	曲物底	針葉樹	－	黒	－					Ⅶ	－	
75	容器蓋	ブナ	B	赤	黒,茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
76	壺蓋	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
77	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
78	椀蓋？	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
79	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
80	椀	ブナ	B	暗褐	黒	外－絵－赤			朱	Ⅲ	Ⅰ	口縁部赤
81	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
82	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
83	平椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
84	平椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ＋Ⅴ	
85	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－銀	ベンガラ		SN	Ⅰ	Ⅱ	
86	椀	－	－	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
87	平椀	不明	－	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
88	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
89	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
90	椀	不明	－	赤	黒茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
91	平椀	ブナ	B	黒茶	黒茶					Ⅰ	Ⅰ	
92	椀蓋	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
93	蓋椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
94	椀	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
95	平椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		朱			Ⅴ	Ⅴ	
96	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
97	椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
98	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
99	椀	トチノキ	A	赤	黒茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
100	椀	不明	－	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
101	椀蓋	広葉樹	－	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
102	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
103	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
104	酒杯	ブナ	B	赤	赤	内－絵－赤	朱	朱	Au	Ⅲ	Ⅲ	
105	酒杯	サクラ亜属	A	赤	赤		朱	朱	Au	Ⅴ	Ⅴ	縁金
106	椀	－	－	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
107	椀	トチノキ	A	赤	黒	内－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅱ	Ⅰ	
108	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
109	椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅴ	Ⅴ	
110	椀	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
111	椀	サクラ亜属	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	

物顕微鏡で確認することで，同時に行なった。

・漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後，簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251JP，ハードナーHY837）に包埋した後，断面を研磨し，漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

・色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には，先の漆膜片をカーボン台に取り付け，日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

(2) 調査結果

今回，調査を行った漆器資料は，椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類および曲物・板物類の合計111点である。この内，挽き物類は，当時の基本的な飲食器である飯椀・汁椀・菜椀である壺・平・菓子椀，およびそれぞれの蓋類，等に対応するものであろう。そしてこれらに酒盃等の若干嗜好性が高い資料もいく例か加わった器種構成となっている。以下，各項目別の調査結果とそれに伴う諸問題について述べる（Table.1）。

(用材選択)

本漆器資料の内，挽き物類である椀・蓋等の樹種には，ブナ科ブナ，カツラ科カツラ，バラ科

Teble. 2　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔材	b．サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白く軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男（1979）『ろくろ、ものと人間の文化史31』などを参考にして作成

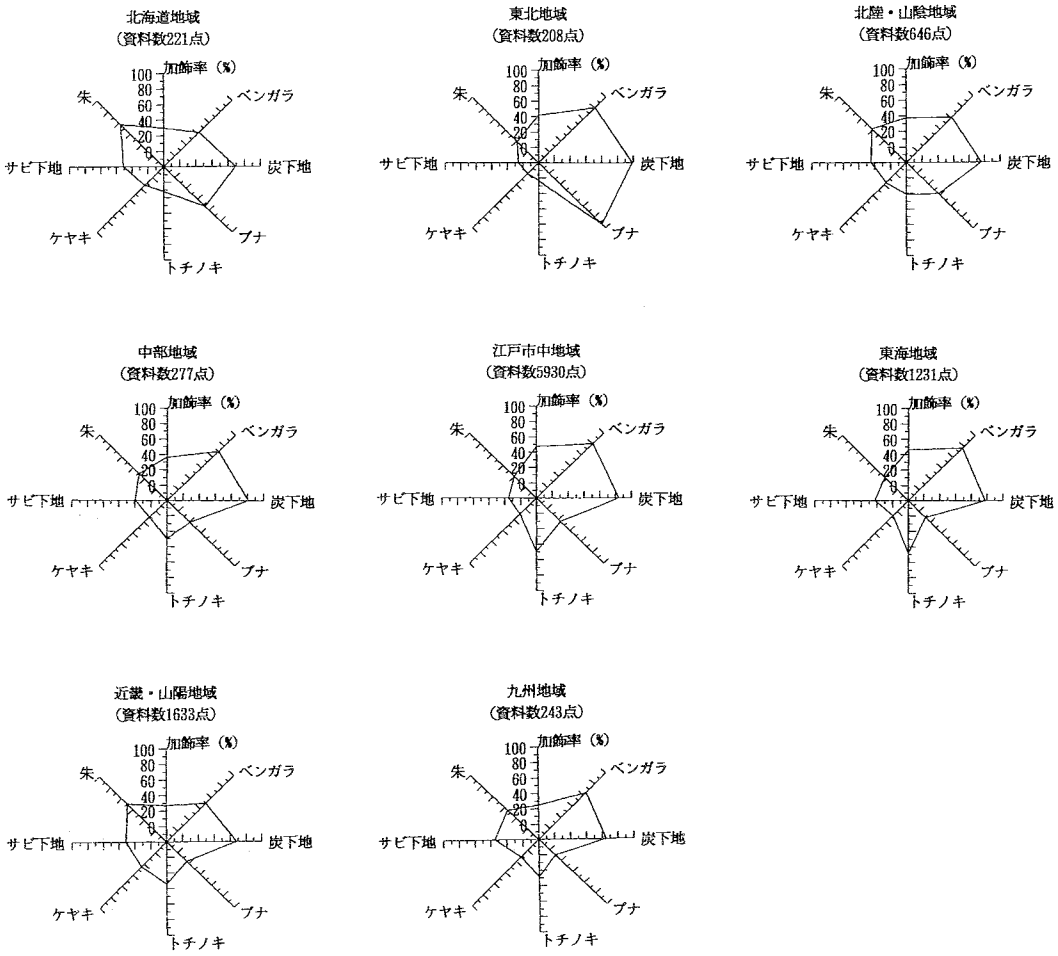
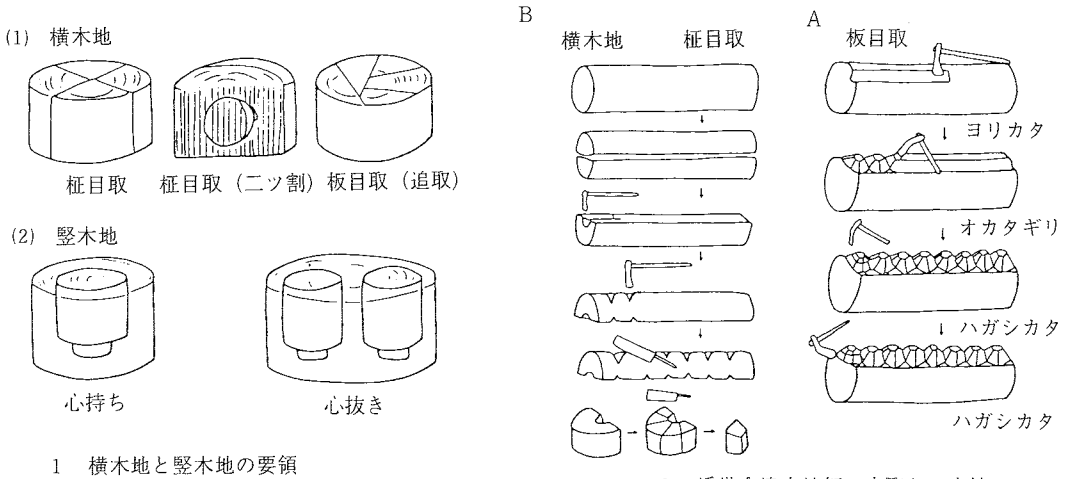


Fig. 1　地域別出土漆器資料の組成（集計例18～19ct）

サクラ亜属，トチノキ科トチノキ等の広葉樹4種類が，曲物・板物類にはヒノキ科ヒノキ等の針葉樹材が確認された。これらの木材の組織，工作の難易，割れ狂い，色光沢，塗り等を考慮に入れて分類すると（Table.2）に示すようになる[1)]。

その上で本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると，優材であるカツラ・サクラ材などと，加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ材の２つのグループに分かれた。これらの出現比率をみてみると，後者のトチノキ材が57.7%，ブナ材が30.6%で，この２種で全体の88.3%を占める。

報告者によるこれまでの全国115遺跡，合計16009点の調査結果によると，本漆器資料を含めた18世紀以降の挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種には，トチノキ・ブナ・ケヤキ材の３樹種の占有率が高く一般的であるが，それぞれの頻度の様相は地域により若干異なる事が窺える。とり



1　横木地と竪木地の要領
（末沢春一郎「近世以降木地師の
ロクロ製品技術の研究」原図）

2　近世会津木地師の木取りの方法
須藤（1982）より原図引用

Fig. 2　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

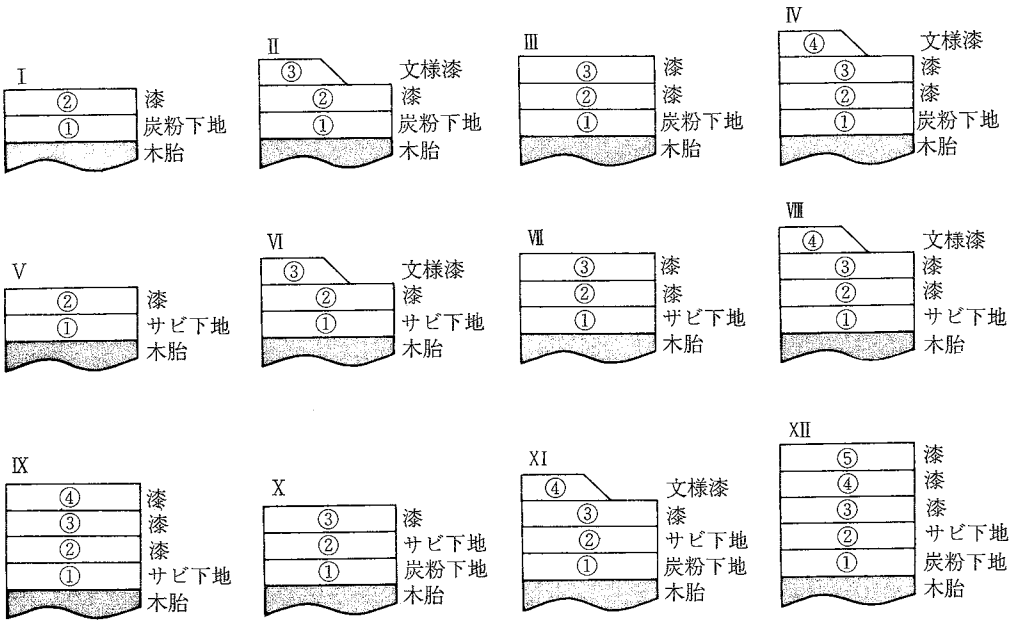


Fig. 3　漆塗り構造の分類

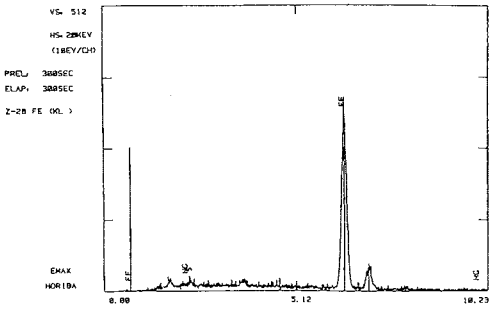


Fig. 4　赤色系漆 ベンガラ（Fe_2O_3）

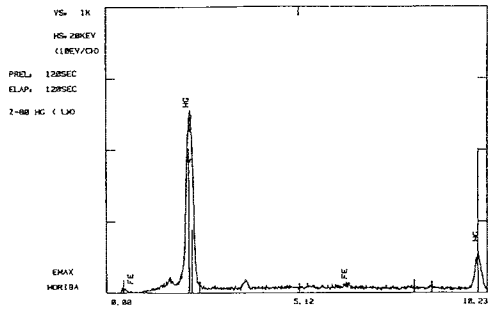


Fig. 5　赤色系漆 朱（HgS）

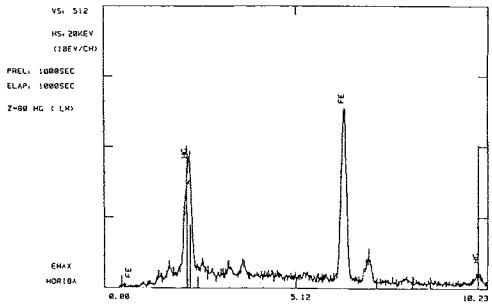


Fig. 6　赤色系漆 朱+ベンガラ（HgS+Fe_2O_3）

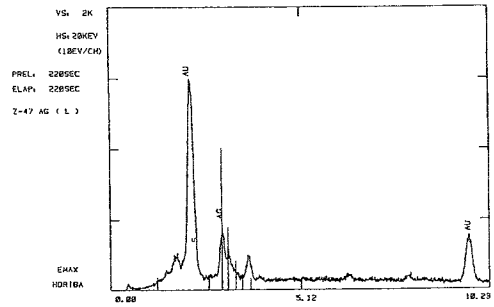


Fig. 7　蒔絵粉材料　金（Au）+銀（Ag）

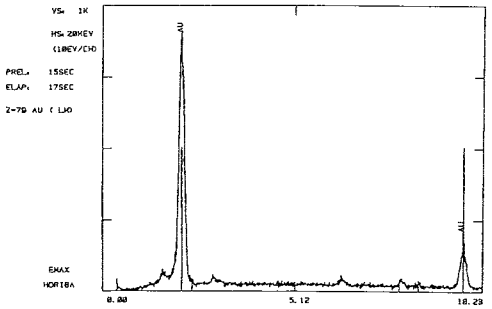


Fig. 8　蒔絵粉材料　金（Au）

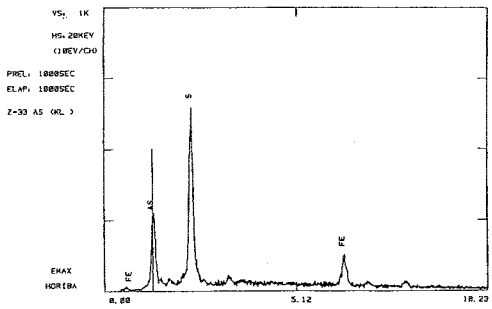


Fig. 9　蒔絵粉材料　石黄（硫化ヒ素As_2S_3）

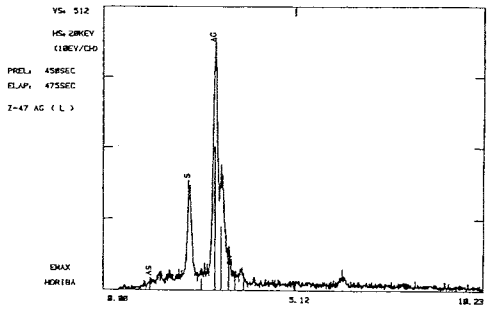


Fig. 10　蒔絵粉材料　銀（Ag）

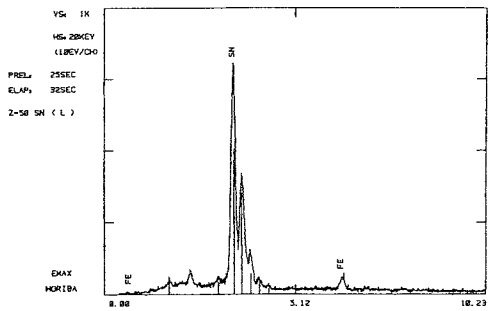


Fig. 11　蒔絵粉材料　錫（Sn）

Fig. 4～11　X線分析結果

わけ全国を大きく8地区に分けて用材の使用比率を集計してみると，東北地区ではブナ材使用が卓越し，北海道・北陸・山陰地区ではブナ材が優勢ながらもトチノキ材使用も増えている。一方，江戸市中・東海・近畿・山陽地区ではややトチノキ材使用が多い傾向が見出された[2)]。この結果を参考にして本漆器資料の用材の使用状況をみてみると，加賀藩国元である金沢城下町を含めた北陸地区の状況よりは，本遺跡が存在する江戸市中の状況と類似しているようである（Fig.１）。

（木取り方法）

資料は，横木地と竪木地に大別され，その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は，竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり，竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（Fig.2）。これは木材の割れ狂い，収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため，不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている[3)]。

本漆器資料の樹種を木取り方法との関係でみてみると，トチノキ材の場合は，横木地板目取り，ブナ材の場合は，横木地柾目取りの割合がかなり高い傾向が見出だされた。一般にトチノキは，芯を中心にして割れ狂いの多い赤味（心材）が広がり，表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分（辺材）がある。シラタは，多く取れても四寸（約12cm）程度しか利用できないので，椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方，ブナは，芯に近いところまで利用が可能なので，木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法が適しているという口承資料がある[4)]。この点からも，本漆器資料の木胎製作の工程が，一貫してそれぞれの用材の性質を考慮に入れた可能性が指摘されよう。

（漆膜面の塗り構造）

漆器表面の漆塗り技法は，大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と，家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料，さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造，特に，各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると，ピークがほとんど見出だされない資料と，粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の２種類に分かれた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより，前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地，後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した[5)]。

次に，地の漆塗り層は，いずれも１層塗りから３～４層塗りまで見出だされるが，簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心である[6)]。そして加飾は，いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（Fig.3）。しかし一部の資料では梨子地・蒔絵等の加飾が施されており，色漆や生漆の上に蒔絵粉を蒔くいわゆる高蒔絵や平蒔絵の高度な技法が見出だされた。（Photo.１）。このことから，本資料の品質には，多様性があることが想定された。

（色漆の性質）

赤色系漆の使用顔料の定性分析と顕微鏡観察の結果，これらはそれぞれベンガラ（酸化第二鉄

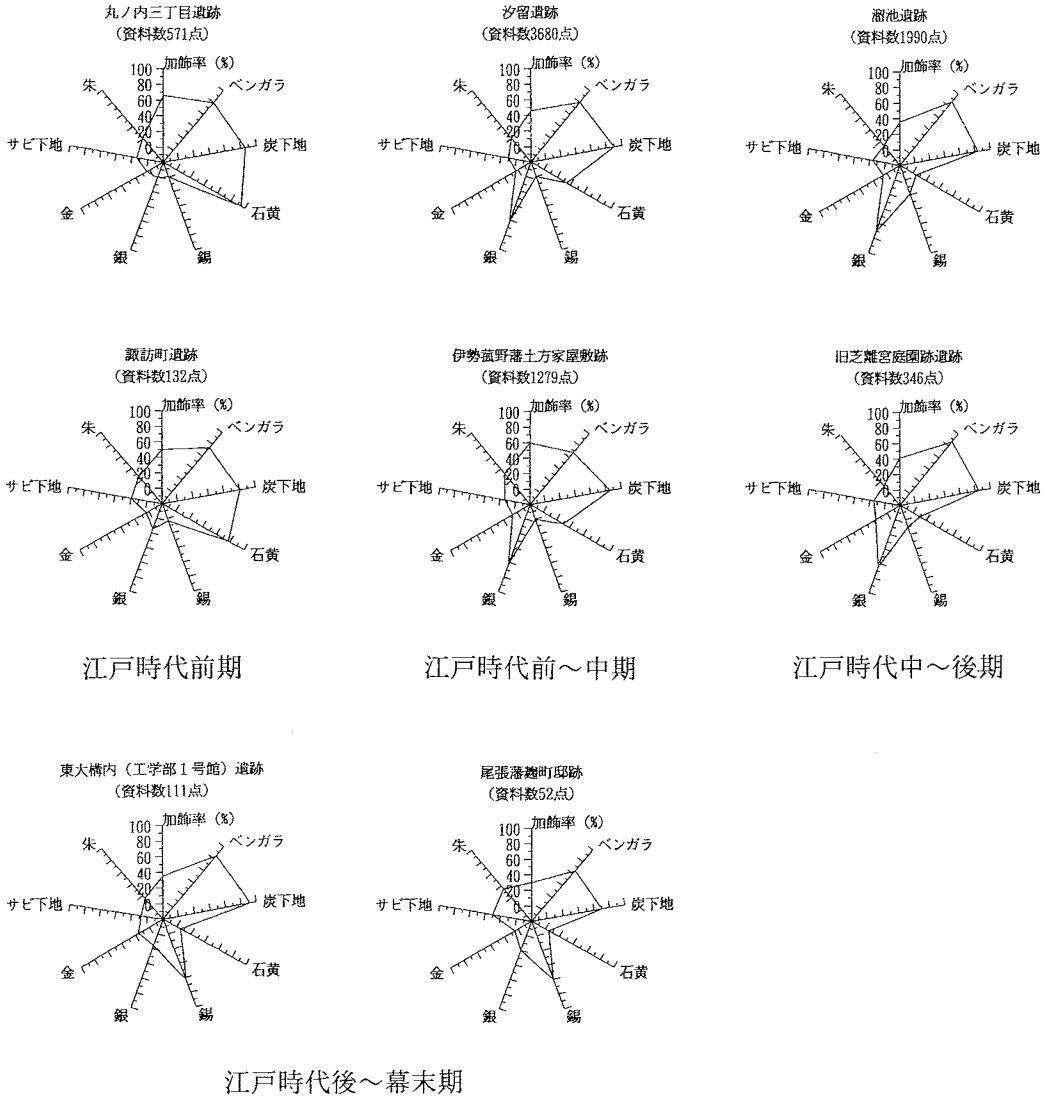


Fig.12　各遺跡にみられる年代別蒔絵材料の変遷

Fe_2O_3），朱（水銀朱 HgS），の二種類の異なる顔料を用いた赤色系漆であると理解した（Fig.4-6）。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては，幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して，江戸時代中期以降には人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである[7]。

本漆器資料の場合も，簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを使用し，堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を使用する例や，また地内面にはベンガラを使用し，地外面の家紋等の加飾部分のみに朱を使用する例等，明らかな朱・ベンガラの使い分け事例も見出された。

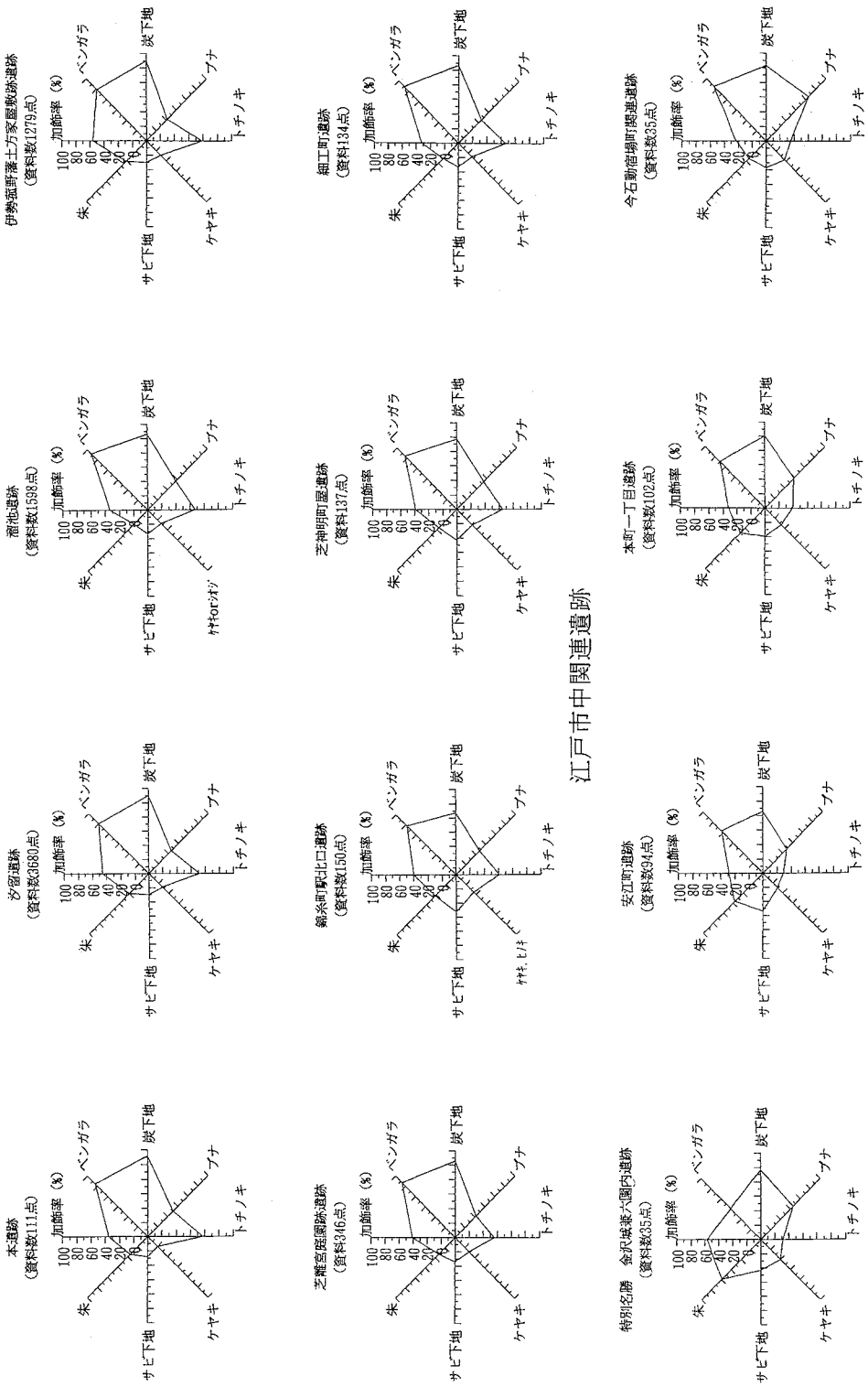
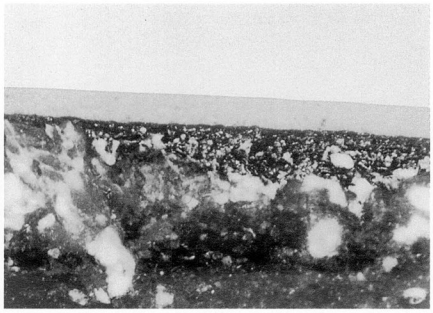
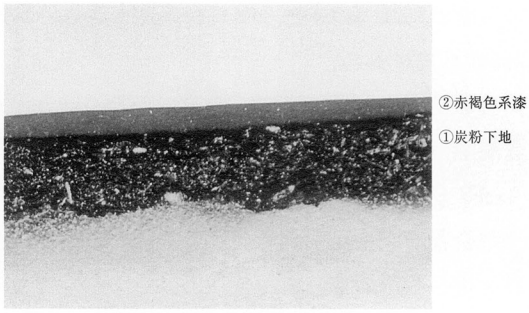


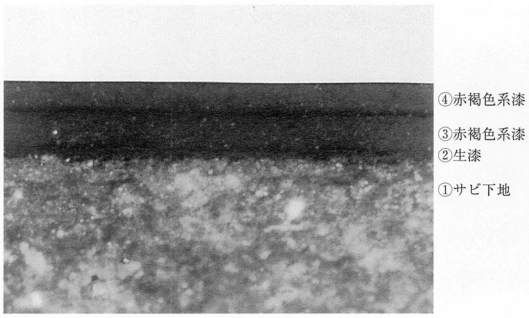
Fig.13　各遺跡出土一括資料の組成　集計例



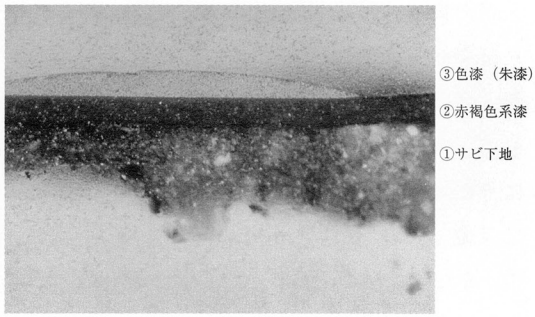
赤色系漆（Ⅰ）（100×）



黒色系漆（Ⅰ）（100×）

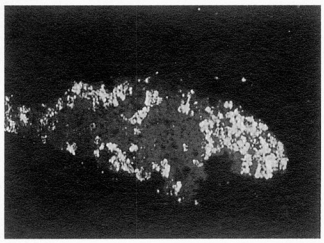


黒色系漆（Ⅸ）（100×）

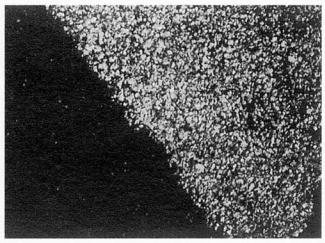


有加飾漆（Ⅵ）（100×）

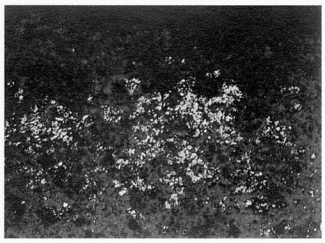
Photo. 1　漆器膜面の漆塗り構造



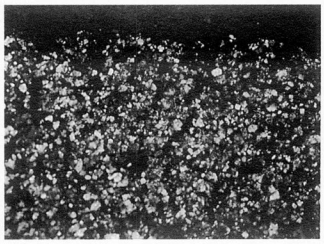
金粉（Au）（100×）



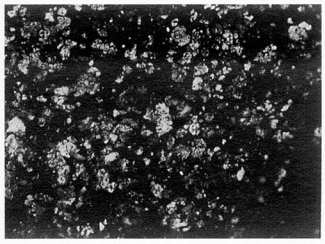
金粉（Au＋Ag）（100×）



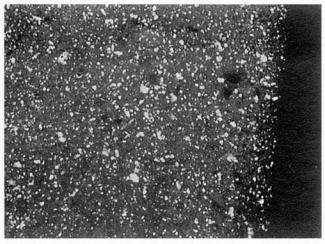
銀粉（Ag）（100×）



錫粉（Sn）（100×）



錫粉（Sn）（200×）



石黄粉（As_2S_3）（100×）

Photo. 2　蒔絵粉材料の粒型

この背景には先の赤色系顔料の調達や価格の問題が反映しているのであろう。

（蒔絵粉の材質）

表面観察において金粉（金箔）もしくは金泥（金彩）によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加粉材料の定性分析を行った結果、Au（金）が認められる資料の他，Ag（銀），Sn（スズ），As_2S_3（石黄・硫化砒素）のそれぞれ異なる材質が見出された。また，金（Au）＋銀（Ag）等の混合粉を使用する例も見出された（Fig.7-11）。この事は，蒔絵加飾には，実際の金（Au）自体を用いる例の他，銀粉や代用金粉である錫粉・石黄粉，さらにはこれらの混合粉を使用する事例があったことを示していよう。また，本漆器資料では，錫粉を用いた蒔絵漆器が多く見出され，蒔絵粉の粒度もそれぞれ異なっていた（Photo. 2）。

江戸期の各種文献資料には，漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体，寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと[8]や，これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器には，明確な価格差が存在したこと[9]等が知られる。この点に関連して，本漆器資料をはじめとする江戸市中における各遺跡の蒔絵漆器資料をもとにして，材質別にその使用比率の集計を行った。その結果，いずれの遺跡・年代の一括資料の場合でも，基本的には金（Au）自体を使用した蒔絵漆器は数％程度で少なく，大半は代用金粉である錫粉や石黄粉，もしくは銀粉（Ag）であった。そして金粉以外の蒔絵粉の材質は，石黄粉（江戸時代前期）→銀粉（江戸時代前～中期）→スズ粉（江戸時代後期）へと年代別に大きく使用状況が変化していた（Fig.12）。これらの結果は，各資料の製作年代の違いとともに，前述したような江戸時代の奢侈禁止令による各社会階層別の蒔絵・梨子地等による加飾した漆器の使用や，所有・調達に関する制限，さらには基本的な価格の違い等が複雑に影響していることを示していよう。いずれにしても，このような赤色系漆の使用顔料や蒔絵粉の材質の問題は，個々の資料の性格を考える上でも大変示唆的である。

3.考察

以上，前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果，本漆器資料は，木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から，吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技術を有する優品資料に至るまで，幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは，文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代，これら什器を使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式），地域性，什器類の使用目的や方法，さらには個々の漆器生産地の製作技法，等さまざまな条件が反映されたものであろう[9]。

本稿では，これらの出土漆器資料を各遺跡の一括資料毎に把握するために，最も一般的な８つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し，それぞれの比率を総出現数の中で集計した[10]。その結果，本出土漆器資料の基本的な様相は，江戸市中における各大名藩邸や一般武家地・さら

には町屋出土のそれと大差が無い，極めて一般的な資料が中心であった（Fig.13）。そして，いずれの一括資料の場合でも基本的には極めて実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としていることも同時に理解された。これは，これら遺跡出土の漆器資料の性格自体が，非日常のハレの食事に供せられるような特別の飲食器類（伝世品として長期間大切に保管管理される場合が多い）とは異なり，普段の食生活で多用され，かつ割合簡単に廃棄されたであろう日常什器類，すなわち（1）通常のゴミ処理や不用品の投棄，（2）屋敷替に伴う什器払い，（3）火災や地震等の不測の事態（災害）に伴う一括廃棄，等に伴う不用品の廃棄資料が中心であることに由来しよう。本漆器資料が出土した調査地点も，広大な加賀藩邸内では長屋エリアでかつやや地味が悪い低地に位置している。そして出土遺構の性格も，共伴する墨書陶器から藩邸内各所から一括収集されたゴミ処理のためのゴミ穴土坑であることが想定されており，本漆器資料の基本的な性格を理解する上で参考となる。

さて江戸市中における藩邸は，各大名家の『江戸屋敷』であると同時に極めて多数の江戸勤番武家が勤務する『江戸表出張役所』であり，かれらの『官舎』でもある。そのため諸藩は藩邸内に多くの江戸勤番武士を抱え，彼らの居住区域（長屋等の詰人エリア）も屋敷内面積の多くを占有していた。このような藩邸内では，各種公的な用向きに使用される什器類の調達は，各藩諸役業務の一環として行っていたようである[11)]。藩はこれら諸役を通じて，御用蒔絵師や塗師らの手になる特別な什器類（婚礼道具や贈答品・御下賜品）の調達以外は，江戸・国元等の御用漆器商人から十人揃・二十人揃など大量に購入していた[12)]。その一方で，江戸藩邸下屋敷内には「仲人」と呼ばれる出入り商人の長屋も完備されており，今日の購買部と同様の機能を果たしていた。各藩邸内居住者の勤番武家は，各個人が国元から持参した自前の生活什器や江戸市中で購入した品物以外は，「私物」としての日常生活で使用した漆器を，その他の日常什器や生活物資（食料品等）とともに，ここで多くを賄っていたようである。いずれにしてもこのような各藩邸内の漆器調達に関する諸条件を考慮に入れると，本漆器資料の由来は国元からの搬入品・江戸市中購入品・私的な調達品（次章参照のこと）と多方面に渡っていたことが想定される。そしてその中でも，本漆器資料の性格自体は，日常生活什器の範疇に入るためか江戸市中で賄ったものが主流を占めたであろうことが同時に推察された[13)]。

今後の課題は，陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが挙げられる。この検討作業を行うことが，本出土漆器資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

4.附章　本漆器資料（資料No.85，86，87，88）と近世吉野塗との関連性

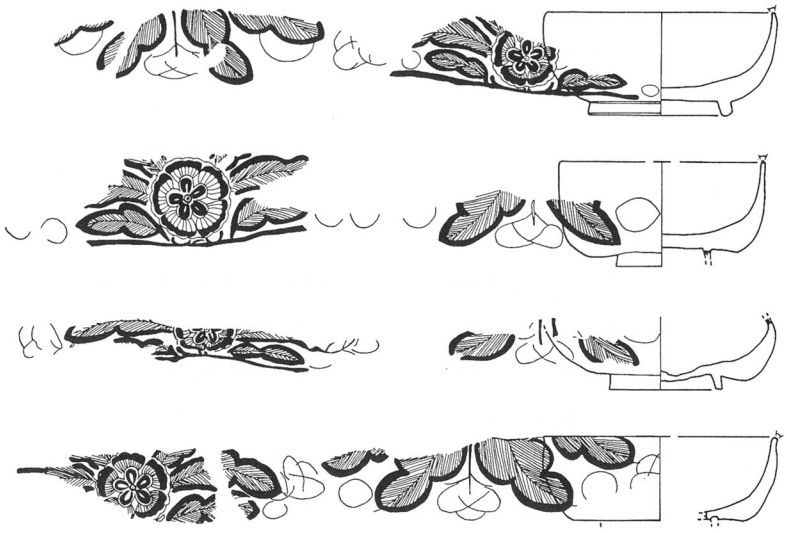
さて本漆器資料のうち，資料No.85，86，87，88の４点はいずれも内外面に黒漆を地塗りし，その地外面に特徴のある花弁文様の図柄を朱漆で加飾した一括セットと想定される漆器椀・蓋資料である（Fig.14）。この花弁文様は，漆工史の分野では吉野山周辺（現在の奈良県吉野郡吉野

Teble. 3　吉野塗比較一覧表

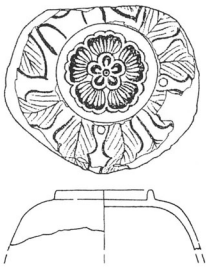
		器形	樹種	木取	表面塗り技法 外	表面塗り技法 外	表面塗り技法 文様	使用顔料	塗装構造 内	塗装構造 外
江戸	東大構内遺跡	椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
		椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
		椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
		椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
	旧芝離宮庭園	Ⅲ	サクラ亜属		黒	黒	内－絵－赤	朱	Ⅳ	Ⅲ
	錦糸町駅北口遺跡	蓋	ブナ	A	黒	黒	外－絵－赤	ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ
	溜池遺跡（永田町二丁目）	汁碗	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
金沢	本町一丁目遺跡	蓋	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
		椀	ブナ	A	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
	安江町遺跡	椀	ブナ	B	黒	黒	外－絵－赤	朱	Ⅰ	Ⅱ
長崎	万才町遺跡	平椀	サクラ亜属	A	黒	黒	外－絵－赤	ベンガラ	Ⅴ	Ⅵ
	（高島宅跡）	平椀	サクラ亜属	A	黒	黒	外－絵－赤	ベンガラ	Ⅴ	Ⅵ
大和	吉野塗（Aタイプ）	Ⅲ	サクラ亜属	A	黒	黒	内－絵－赤	朱	Ⅳ	Ⅲ
	（Bタイプ）	Ⅲ	ブナ	B	黒	黒	内－絵－赤	朱	Ⅱ	Ⅰ
	（Cタイプ）	Ⅲ	ブナ	A	黒	黒	内－絵－赤	朱	Ⅱ	Ⅰ

Teble. 4　江戸時代における吉野山の物産一覧表

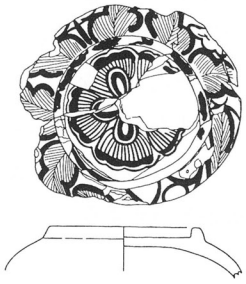
文献名	筆者（年代）	内容
「和州巡覧記」	貝原益軒	萬、榧、煙草、紙（くずとてあつき紙あり。又杉原には薄紙あり）、漆、茶、塗物（ぬりもの、椀・折敷・まげ物小樽等色々多し）、燧、鰷（あゆ）、釣瓶鮓、柿、山折敷、松茸、椎茸、花龍、造花、頭巾（ときん）、法螺の貝
「毛吹草」	松江重頼（寛永十五年）	吉野漆、葛粉、榧、御所柿（ごしょがき）、松茸、前胡（ぜんこ）、枸杞子（くこし）、松脂（まつやに）、松角（まつかく書院木に用う）、椙丸太（すぎまるた・上に同じ）、煎茶、塗鉢（ぬりばち）、山折敷（やまをしき）小紙（こがみ鼻紙に之を用う）、塵雑紙（ちりざっし）、国栖魚、鮎白干（あゆのしらぼし）、釣瓶鮨（つるべずし）
「和漢三才図会」（大和国土産）		漆、杉原紙、漆渡紙、葛粉、榧、煙草、御所柿、鰷鮓、杉丸太、国栖紙、塗挽盆
「七部集」	松尾芭蕉	「椀売りも出でよ吉野の初時雨」
「芳野元賦」	丈草	葛、榧、煙草、紙・漆・茶・塗物（ぬりもの、椀、折敷、まげ物、小樽等々色々多し）、燧、鰷、釣瓶鮓、柿、山折敷、松茸、花龍、造花、頭巾（ときん）、法螺貝
「大和志」	（享保年間 廿一年）	有三種背為佳品又有金漆 漆 延喜式及和名抄
「農業全書」	宮崎安貞	吉野村植栽漆



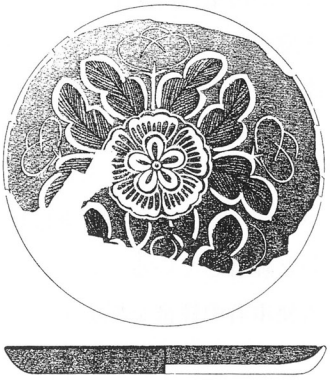
Ⅰ．本遺跡の出土漆器資料



錦糸町北口遺跡Ⅰ

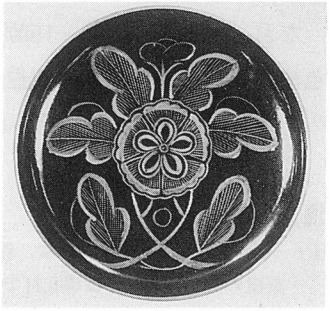


金沢市本町一丁目遺跡



旧芝離宮庭園

Ⅱ．各遺跡の出土漆器資料



Ⅲ．吉野町の伝世品（民具　吉野町旧家所蔵）漆器資料

Fig.14　近世吉野塗関連資料

町や下市町周辺）を中心に生産された近世吉野塗（後に京漆器でも茶会席用の高級漆器の図柄に吉野絵の意匠を導入したと口承資料は伝えている）の特徴の一つである「吉野絵」と通称される芙蓉もしくは桜の意匠を用いた漆絵図柄である。近年，幾つかの近世遺跡からも同様の図柄を有する漆器椀・蓋・皿資料が検出されている。しかし，近世吉野塗の生産は早くから途絶したため詳細は不明の点が多い[14)]。

ここでは本漆器資料と近世吉野塗との関連性を考察する目的で，これまで調査する機会に恵まれた本漆器資料を含めた「吉野絵」が加飾された7遺跡12点の出土漆器資料と，明らかに近世吉野塗と想定される吉野山周辺で収集された民具資料15点の合計27点の調査結果を纏めて相互を比較検討した（Table.3)。その結果，「吉野絵」が加飾された漆器資料はいずれも用材にはブナ科ブナ材もしくはバラ科サクラ亜属材が使用されていた。そしてこれらの下地には一部サビ下地を用いる資料が確認されるものの，基本的には炭粉下地の上に1～2層上塗り漆を塗布するやや簡便な漆塗り技法の資料が多かった[15)]。赤色漆による「吉野絵」図柄は，一点のみを除きいずれも朱顔料を使用した朱漆であるが，その加飾タッチには色絵の筆むらや筆がれが顕著に見出され，これらが肉筆加飾であることがわかる。また一部の皿資料では，皿外輪の縁取りの朱漆が半乾きの状態の時に皿を重ねたためか，地外面底側部にも朱漆が付着しており，これらが量産的な規格品漆器である可能性を示唆していよう。いずれにしても本漆器資料の材質および製作技法はいずれも同一であり、他の「吉野絵」が加飾された出土漆器資料や近世吉野塗資料とも類似した組成であった。このことは本資料の由来は現段階では断定できないものの，近世吉野塗との相互関連性を積極的に否定する要素は見出されていない（すなわち近世吉野塗との関連性が想定される）ものと理解している。いずれにしても本遺跡からもこのような漆器資料が検出されたことは，当時の使用者の性格を理解する上でも興味深い結果といえよう[16)]。

謝辞

本調査を行なうにあたり，東京大学の寺島孝一先生，同大学埋蔵文化財調査室の原祐一氏，堀内秀樹氏をはじめとする多くの方には，大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

なお，本調査は1995－1997年度文部省科学研究費　基盤研究（C）（細目：文化財科学）「出土色漆における退色現象の把握とその保存に関する基礎的研究（研究代表者：北野信彦)」の費用の一部を使用し，本稿はその成果の一部を含んでいる。

注

1）　末沢（1975）の調査では，近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には，早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靭性がある材を適材であるとしている。

　　橋本鉄男（1979)『ろくろ　ものと人間の文化史31』　法政大学出版局

2）　北野信彦（1996)「近世遺跡出土漆器資料の生産・流通・消費に関する諸問題」『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨集』P49－52　日本考古学協会

3）　北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』P81－101　日本民具学会編　雄山閣出版，等を参照されたい。

4）　須藤（1982）の調査によると，近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法の場合，横木地板目取りはトチノキ地帯に，同柾目取りはブナ地帯に定着し，その細かい技術は，個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤護（1982）『日本人の生活と文化，暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

5）　サビ下地を用いた漆器の生産自体は，『延喜式』の髹漆技法をみるまでもなく，その歴史は古い。しかしその生産体制が地方の漆器生産においても普及・一般化するのは，漆器の需要とそれに伴う漆器生産量が増大化した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として，近世輪島塗の台頭や，炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津，近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地（堅地物）技術の導入などがあげられよう。なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在，両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦（1993）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・１ ― 文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として ― 」『古文化財の科学　第38号』P65－79　古文化財科学研究会

6）　このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の１つに，新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師，漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ，人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。［中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており，各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集2』国土地理協会

7）　江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると，江戸時代前期段階には両者とも海外輸入品が多いためか，相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では，両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ，とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦（1994）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・２－文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について－」『古文化財の科学　第39号』P93－102　古文化財科学研究会

北野信彦（1996）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・３－文献史料からみた赤色系漆に使用する朱の製法について－」『文化財保存修復学会誌　第41号』P88－100　文化財保存修復学会

8）　江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった雛道具類について，享保20年(1735)の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には，「一.同諸道具，梨子地ハ勿論，蒔絵無用ニ可仕候，上之道具たりとも，黒塗ニ可仕候。(名古屋　叢書第三巻)」という記述がみられる。又，武家社会内部でも，万治3年(1660)の紀州徳川家（御家中祝言道具達）では，藩士のランクを1万石から200石までの8段階に分け，道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器である貝桶は2400石以下の者には調達が認められておらず，諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。(南紀徳川史　法令制度第四)

9）　寛延四年(1751)の『名古屋諸色直段集，寛延四未年小買物諸色直段帳』には，漆器の髹漆技法別の価格が記載されている。この史料では，布着せ蝋色塗（上品）:常溜塗（中品）:常拭漆塗（下品）の相対価格差は，約51:3.4:1と算定される。また，伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には，伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが，それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は，約18:6:1と算定され，いずれの事例からも材質や製作技法の違いにより，漆器資料には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦（1997）「文献史料からみた近世蒔絵漆器について」『元興寺文化財研究　第61号』P1－8

（財）元興寺文化財研究所

10)　本調査では個々の漆器資料からもっとも一般的な８つの製作技法上の優劣ランクの項目を抽出しそれぞれの比率を総個体数の中で計算してその結果をレーダーチャート方式で図化するものである。すなわちレーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の製作技法の特徴を取り，それと相対する左側には，朱・サビ下地・ケヤキ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率（%）をそれぞれ配置した。この配置で示されるレーダーチャートは，その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを，左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

11)　寛永16年(1639)の長州萩藩毛利家中「江戸御番手付立」には，江戸藩邸内の諸役割り当てが記載されており，陶磁器・桶等の器物一切を保管・管理する「濃物方（35石以下無給通士)」，御台の家具・器物を出納する「家具方（25石以下徒士)」，これらの諸会計事務を司る「算用方（60石無給通士)」等の職名が知られる。

山本博文（1991)『江戸お留守居役の日記』読売新聞社

北野信彦（1993)「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」『綜合郷土研究所　紀要38巻』P115－134　愛知大学

12)　享保2年(1717)の備前庭瀬藩板倉家中文書には，年間必要経費となる御殿女中等の使用飲食器の品目・経費が記載された定書がある。この史料では，御局同並迄：上瓏衆同並迄：茶之間中居半下迄：徒巳下足軽迄：下女・中間の身分別の椀代相対比率は，約9.4:5:3:1.6:1と算定される。

13)　個々の出土漆器資料の分析結果は，既刊の下記発掘調査報告書の項目を参照されたい。

北野信彦（1992)「特別名勝　兼六園内出土漆器資料の製作技法」『特別名勝兼六園（江戸町推定地）発掘調査報告』P73－85　石川県立埋蔵文化財センター

北野信彦（1992)「細工町遺跡出土漆器資料の製作技法」『細工町遺跡』P163－173　新宿区厚生部遺跡調査会

北野信彦（1995)「出土漆器の製作技法」『丸の内三丁目遺跡』P1－18　東京都埋蔵文化財センター

北野信彦（1995)「出土漆器資料の製作技法」『本町一丁目遺跡』P162－172　金沢市教育委員会

北野信彦（1996)「第2節　出土漆器資料の製作技法」『墨田区錦糸町駅北口遺跡・1』P303－311　墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団

北野信彦（1996)「2.溜池遺跡出土漆器資料の製作技法」『溜池遺跡』P161－191　都内遺跡調査会

北野信彦（1997)「出土漆器資料の製作技法」『安江町遺跡』P167－177　金沢市教育委員会

北野信彦（1997)「出土漆器資料の製作技法」『汐留遺跡1』P87－137　東京都埋蔵文化財センター

14)　近世吉野塗の沿革を纏めてみると，江戸時代初期の寛永年間(1624－1643)頃に小倉屋喜兵衛がそれまで吉野山周辺で生産されていた漆器に改良点を多く加えて日用生活什器を中心とした漆器に吉野桜もしくは芙蓉紋様（これらを吉野絵と呼ぶ）を色漆で描き，吉野の特産品としたことから始まるとされる。そして，二度の衰退・途絶をはさみ，大きく三期に生産の沿革はわけられる。すなわち第一期は，先に記したような江戸時代前期の近世吉野塗の創出期。第二期は一度衰退した漆器業を再興すべく吉野山より春慶塗の技法を導入したとする江戸時代中期頃。第三期は，天明の大飢饉(1782－1787)によりダメージを受けた漆器生産地を寛政年間(1789－1800)頃に吉田屋重兵衛らが回復を図り，やがて安政5年(1858)の虚空蔵講という漆器業者仲間設立，さらには明治期以降へと受け継がれていく江戸時代後期頃の三期である（大正８年刊『奈良縣吉野郡史料（中巻)』による)。吉野山周辺は蔵王堂金峰山寺の参拝や桜の名所として広く世間にも知られていたために，この「吉野塗」も当時の主要な吉野産物の一つとして挙げられている（Table.4)。吉野地方は，良質な吉野漆の栽培，吉野紙（漆漉紙）の生産，良質で豊富な森林資源と中世以来の吉野轆轤業の発展等，良質な材料と生産技術に恵まれた漆器生産には本来有利な土地柄であったためか，これが吉野塗の創出・発展の背景となったことは充分に考えられることであろう。しかし，基本的には吉野山特産品という側面を持っていたためか，江戸時代当時の生産規模はそれほど大きなものではなく，時々の経済状況や社会情勢，さらには天明飢饉や災害等の影響により漆器の販路や生産体制が途絶状態に陥いる等の生産基盤自体大きく左右されるような不安定要素も併せ持ってい

た一地方漆器生産地であったことが知られる。

15）　やや優品に属するサビ下地を施した漆器（長崎市中高島秋帆邸跡出土資料や加賀藩家老本多家所蔵什器類等）の場合は，吉野生産地を由来とする日常生活什器類ではなく，口承資料が伝えるような後発の京都生産地由来の茶会席道具の一部である可能性もある。

北野信彦（1993）「栄町遺跡出土漆器資料の製作技法」『栄町遺跡』P79－83　長崎市遺跡調査会

16）　江戸時代には，全国的な経済・流通圏が発達したため，今日における伝統工芸・物産名産品の基礎をなす地方産業の多くが確立した時代でもある。江戸時代に発達した地方漆器生産地には，本報で取り上げるような近世吉野塗や小田原漆器のような地方土産の一つとして発展した漆器生産地の他，(1) 奥州会津塗・紀州黒江塗・尾州木曾漆器等に代表されるような各藩主導による経済政策の一環として産業保護および拡大政策が積極的に講じられた量産型日用漆器を対象とした漆器生産地，(2) 近世輪島塗に代表されるような行商という積極的で組織的な販路拡大を図ったやや優品を対象とした漆器生産地，(3) 大名諸道具や御下賜品類をはじめとする公的で高級な漆器を特別注文生産するような各藩御用塗師の工房的な漆器生産地等，小規模なものから大規模生産地に至るまでそれぞれの需要と供給に応じて全国で数多くの地方漆器の生産が行われていたようである。そして江戸市中の日用漆器では，奥州会津塗・紀州黒江塗・近江日野椀（江戸時代後期頃は尾張木曾漆器・天領駿府塗に変わる）が大規模生産地として知られており，ここからの搬入品が多かったようである。

北野信彦（1992）「發昌寺遺跡出土の花弁文様漆絵盆（1）.（2）」『民具マンスリー　第25巻3.4号』P1－12，16-20　神奈川大学常民文化研究所

東京大学構内遺跡調査研究年報 2

1997年度

1999 年 3 月 31 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4－6－1

印　　刷　森重印刷株式会社